



文化庁

令和3年度文化芸術振興費補助金（地域文化財総合活用推進事業）



JAPAN HERITAGE

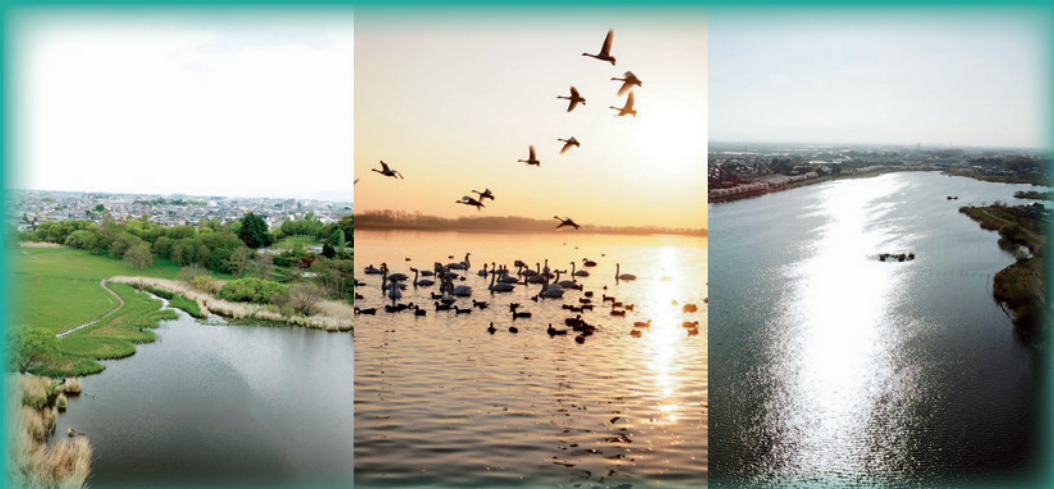
日本遺産

里沼（SATOI-NUMA）

―「祈り」「実り」「守り」の沼が磨き上げた館林の沼辺文化―

ガイドの手引き

里沼ランドナビゲーター育成講座テキスト



館林市「日本遺産」推進協議会

●この本を利用するにあたって

- (一) この本は、令和元年（二〇一九）五月二十日に文化庁より「日本遺産」に認定を受けた『里沼（SATOINUMA）―「祈り」「実り」「守り」の沼が磨き上げた館林の沼辺文化―』のストーリーをより深く理解するため、館林市の「里沼（SATOINUMA）」来訪者を案内するガイドの方々に向けて、里沼をガイドする時のマニュアルとなるような手引書（ガイドブック）として作成したものである。
 - (二) この本は、館林市の「里沼」を案内するにあたって、日本遺産のストーリーとともに、里沼に関する基礎的なデータや各沼の説明、構成文化財等の説明を、周辺の自然や歴史文化、風土や民俗など、周辺に暮らす人々と沼との関わりを理解できる構成となるよう配慮した。
 - (三) 日本遺産「里沼（SATOINUMA）」は市内に所在する三つの沼を中心に三八の文化財で構成されており、各沼の周りに所在する里人の足跡を通して沼辺で暮らす人々の歴史文化をストーリー化したものである。
 - (四) 詳しく知りたい方は、『館林市史普及版―館林の歴史―』（二〇一九年刊行）を、さらにもっと詳しく知りたい方は『館林市史』の通史編・資料編・特別編を読まれることをお勧めする。
- ※本書は、令和元年度文化庁の地域文化財総合活用推進事業の一環である、官学連携「SATOINUMA」事業として、東京電機大学と館林観光ボランティアガイドの会がワークショップを行って作成したものである。本書の執筆は、同ガイドの会の岡屋英治が担当した。
- ※令和三年度文化庁地域文化総合活用推進事業である里沼ランドナビゲーター育成支援事業の実施にあたり、里沼ガイド講習会用テキストとして改訂を行った。

〈日本遺産豆知識〉

- 日本遺産とは
- ・平成二十七年（二〇一五）に文化庁が創設した制度。地域の歴史的魅力や特色を通じて、我が国の文化や伝統を語るストーリーを、「日本遺産」として認定（二〇二〇年までに一〇四件を認定）。
 - ・日本遺産には、地域型（単独自治体）とシリアル型（複数自治体）がある。
 - ・従来の文化財行政は、個々の歴史的遺産を点として指定することで保存してきたが、日本遺産は点在する各遺産をストーリーとしてつなぎ、面的活用・魅力発信することを目的としている。
- 世界遺産との違い
- ・世界遺産は、昭和四十七年（一九七二）にできたユネスコ（国際連合教育科学文化機関）の制度。
 - ・日本では平成四年（一九九二）に条約を締結し、令和三年度までに日本で二五件が登録されている（文化遺産二〇件・自然遺産五件）。
- 構成文化財とは
- ・「日本遺産」のストーリーを構成する文化財群。地域に受け継がれている有形・無形のあらゆる文化財が対象で、指定文化財（国・県・市町村）のみならず、未指定の文化財も含まれる。ただし、国指定・選定のあるものを必ず一つは含めることが認定要件。
- 北関東地域で認定されている主な「日本遺産」
- ・群馬県：「かかあ天下 ―ぐんまの絹物語―」（シリアル型（群馬県桐生市・甘楽町・中之条町・片品村））
 - ・茨城県・栃木県など：「近世日本の教育遺産群 ―学ぶ心・礼節の本源―」（シリアル型（茨城県水戸市・栃木県足利市・岡山県備前市・大分県日田市））
 - ・埼玉県：「和装文化の足元を支え続ける足袋蔵のまち行田」（地域型（埼玉県行田市））
 - ・栃木県：「地下迷宮の秘密を探る旅 ―大谷石文化が息づくまち宇都宮―」（地域型（栃木県宇都宮市））

目次

●この本を利用するにあたって

目次

1 「里沼」ガイドのための基礎知識	2
(1) 日本遺産「里沼(SATOINUMA)」ストーリー	2
(2) 「里沼」ってなあに?	5
(3) 「館林」ってどんなところ?	6
① 田山花袋の見た館林②地形や地理、自然的側面から見た館林	
③ 歴史や文化、風土的側面から見た館林	
2 祈りの沼「茂林寺沼」を歩く	8
(1) 祈りの沼「茂林寺沼」ストーリー	8
(2) 祈りの沼「茂林寺沼」案内のテーマとポイント	9
(3) 祈りの沼「茂林寺沼」ストーリーを語る構成文化財	10
① 茂林寺沼及び低地湿原	10
② 茂林寺(分福茶釜)	11
③ 茂林寺のラカンマキ	12
④ 堀工町のどんど焼き	12
③⑨ 蛇沼及び間堀遺跡出土品	13
3 実りの沼「多々良沼」を巡る	14
(1) 実りの沼「多々良沼」ストーリー	14
(2) 実りの沼「多々良沼」案内のテーマとポイント	15
(3) 実りの沼「多々良沼」ストーリーを語る構成文化財	16
① 多々良沼	16
② 多々良沼遺跡(カナクソ)	17
③ 内陸古砂丘	17
④ 大谷休泊の墓	18
⑤ 上三林のささら	19
⑥ 沼の漁具と日向舟	20
④⑩ 近藤沼(ホリアゲタ)	21
4 守りの沼「城沼」を周る	22
(1) 守りの沼「城沼」ストーリー	22
(2) 守りの沼「城沼」案内のテーマとポイント	23
(3) 守りの沼「城沼」ストーリーを語る構成文化財	24
① 城沼	24
② 封内経界図誌	25
③ 上毛館林城沼所産水草図	25
④ 館林城跡(三の丸土橋門・城沼墾田碑)	26
⑤ 尾曳稲荷神社	27
⑥ 館林城絵馬	27
⑦ 躑躅ヶ岡(躑躅)へつつじが岡公園	28
⑧ 善導寺(榊原康政の墓)	29
⑨ 善長寺(祥室院殿の墓、お辻・松女の墓)	30
⑩ 竜の井・青龍の井戸	31
⑪ 旧館林藩士住宅	32
⑫ 古蹟洗堰	33
⑬ 竹生島神社	33
⑭ 田山花袋旧居	34
④⑩ 長良神社と館林城下町の総構え	35
5 「里沼」のもてなし文化に触れる	36
(1) 「里沼」のもてなし文化ストーリー	36
(2) 「里沼」のもてなし文化 案内のテーマとポイント	37
(3) 「里沼」のもてなし文化 ストーリーを語る構成文化財	38
① 躑躅ヶ岡(躑躅)へつつじが岡公園 ※再掲	38
② 城沼の渡し舟	39
③ 小室翠雲画「邑楽公園躑躅ヶ岡之図」	39
④ 旧秋元別邸	40
⑤ 正田醤油(株)旧店舗・主屋(正田記念館)	41
⑥ 東武鉄道館林駅	42
⑦ 創業期日清製粉館林工場事務所(製粉ミュージアム本館)	43
⑧ 旧上毛モスリン事務所	44
⑨ 分福酒造店舗(毛塚記念館)	45
⑩ 旧館林信用金庫(市役所市民センター分室)	46
⑪ 旧館林二業見番組合事務所	47
⑫ 田山花袋関連資料(田山花袋記念文学館)	48
⑬ 川魚料理(鯰・鯉・鮒・鰻料理)	49
⑭ 館林のうどん	50
⑮ 麦落雁	51
④⑫ 織姫神社と館林袖(建造物・民俗)	52

1 「里沼」ガイドのための基礎知識

(1) 日本遺産「里沼(SATO-INUMA)」ストーリー

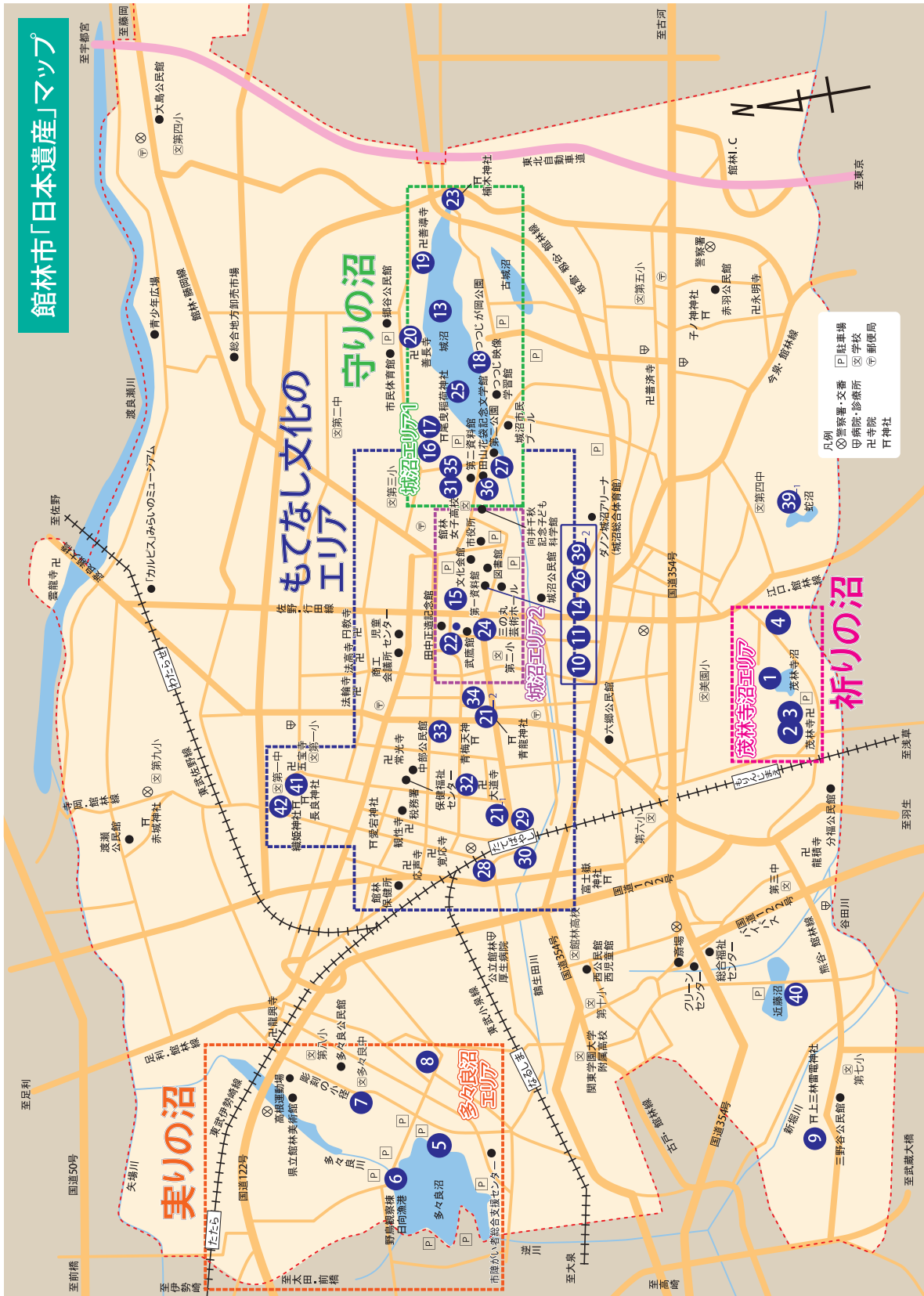
日本遺産『里沼(SATO-INUMA)―「祈り」「実り」「守り」の沼が磨き上げた館林の沼辺文化―』ストーリー概要(1)

関東の山々が一望できる館林では、今も多くの沼と出会うことができる。館林の沼は人里近くにあり、「里山」と同様に人々の暮らしと深く結び付き、人が沼辺を活かすことで良好な環境が保たれ、文化が育まれてきた「里沼(SATO-INUMA)」であった。館林の里沼は、沼ごとに特性が異なる。その歴史を紐解くと、里沼の原風景と信仰が共存する茂林寺沼は「祈りの沼」、沼の恵みが暮らしを支えた多々良沼は「実りの沼」、館林城とつつじの名勝地を守ってきた城沼は「守りの沼」と言い換えることができる。館林の里沼を辿れば、それぞれの沼によって磨き上げられた館林の沼辺文化を味わい、体感することができる。

【日本遺産「里沼 SATO - NUMA」構成文化財】

No.	名称
1	茂林寺沼及び低地湿原
2	茂林寺(分福茶釜)
3	茂林寺のラカンマキ
4	堀工町のどんと焼き
5	多々良沼
6	多々良沼遺跡(カナクノ)
7	内陸古砂丘
8	大谷休泊の墓
9	上三木のざさら
10	封内経界図誌
11	沼の漁具と日向舟
12	川魚料理(鯉・鯰・鰻料理)
13	城沼
14	上毛館林城沼所産水草図
15	館林城跡(三の丸土橋門・城沼壘田碑)
16	尾曳稻荷神社
17	館林城絵馬
18	躑躅ヶ岡(躑躅)[つつじが岡公園]
19	善導寺(榊原康政の墓)
20	善長寺(祥室院殿の墓、お辻・松女の墓)
21	竜の井・青龍の井戸

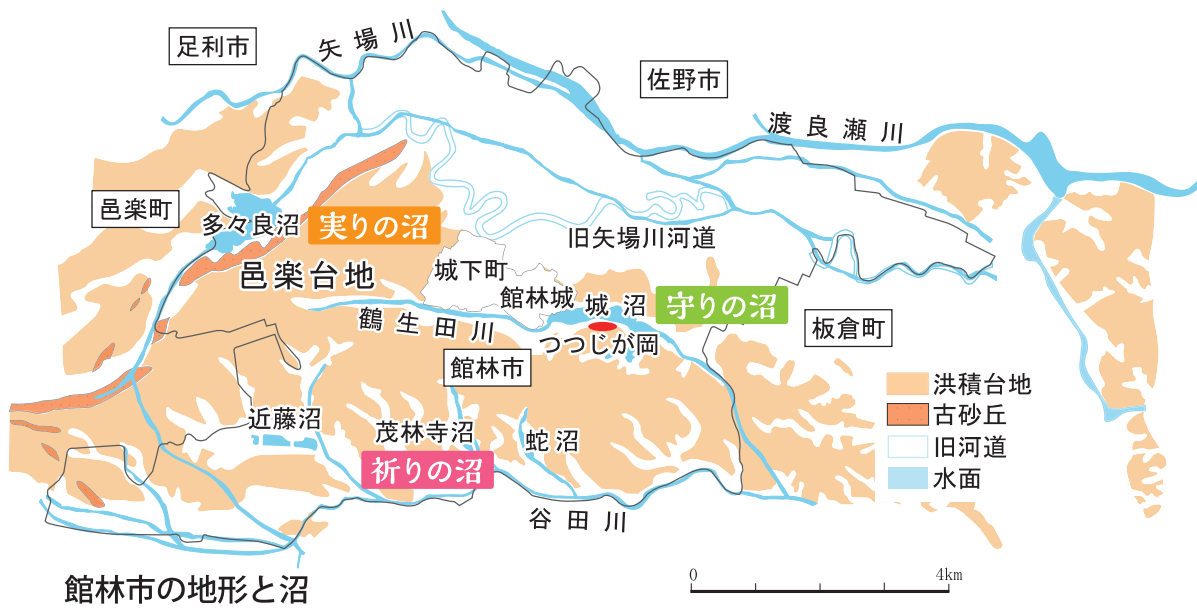
No.	名称
22	旧館林藩士住宅
23	古蹟洗堰
24	竹生島神社
25	城沼の渡し舟
26	小室翠雲画[邑楽公園躑躅ヶ岡之図]
27	旧秋元別邸
28	正田醤油(株)旧店舗・主屋[正田記念館]
29	東武鉄道館林駅
30	創業期日清製粉館林工場事務所 [製粉ミュージアム本館]
31	旧上毛モスリン事務所
32	分福酒造店舗[毛塚記念館]
33	旧館林信用金庫(市役所市民センター一分室)
34	旧館林二見見番組合事務所
35	田山花袋旧居
36	田山花袋関連資料(田山花袋記念文学館)
37	館林のうどん
38	麦落雁
39	へびぬまおと 蛇沼及び間堀遺跡出土品
40	近藤沼(ホリアゲタ)
41	ながらじんしゃ 長良神社と館林城下町の総構え
42	おりひめじんしゃ 織姫神社と館林軸



全体図中に印の無い 12・37・38 は市内店舗でお召し上がりください

日本遺産『里沼（SATOINUMA）―「祈り」「実り」「守り」の沼が磨き上げた館林の沼辺文化―』ストーリー概要(2)

- ① 沼は、古代・万葉の頃には「隠沼」と詠われ、水辺の草木に囲まれてひっそりとした竹まいを持ち、人を寄せ付けない神聖な場であった。
いつしか、人々が沼に近づき集う中で、暮らしと結びつき、沼と共生した生業や文化が生まれ、沼は「里沼」となった。
里沼は、自然と暮らしが調和した生活文化を今に伝える、我が国の貴重な財産である。
 - ② 新田開発や近代化の波にもまれ、各地から沼が消え去りつつある今、館林では、時を重ねながら、それぞれの特性を磨いてきた、希少な里沼を見ることができると。
 - ③ 館林では、冬の朝夕に白鳥たちが沼から沼へと雁行する光景を目にすることができる。大小の河川が網目のように広がる関東平野には、かつて多くの沼が存在したが、近世以降の様々な開発によってほとんどが姿を消し、耕地や工場用地、宅地などに変わった。
- しかし、館林には茂林寺沼・多々良沼・城沼をはじめ、近藤沼・蛇沼など今も大小の沼が存在し、沼辺を行き交う水鳥たちの良い棲みかとなっている。
- 利根川と渡良瀬川に挟まれた館林の地形は、標高二〇mを境に低地と台地からなる。台地に入り組んだ谷から自然に湧き出た水は低地で滞留し、堰き止められて多くの沼が生まれた。その沼の畔に人の手が加わることで、館林の「里沼」の歴史が始まった。



② 「里沼」ってなあに？

「里沼」は「里」と「沼」の合成語で、「里山」になぞらえた新しい概念。現在、人と自然の共生する社会の姿として「里山」という概念が国内で浸透し、近年、その概念を広く自然環境に当てはめて多様な生態系を保全するため、環境省で「里地里山」「里海」という用語が広く使われている。

① 「里」とは？

- ・「里（り・さと）」とは面積や長さの単位を表す言葉。
 - ・古代中国では三〇〇歩四方の面積を「里」といい、集落の最小の単位を示す言葉で、後にこの「里」の一边の長さのことを指すようになる。
 - ・集落単位の「一里」の戸数は大きくても百戸ぐらいまで、大集落は複数の「里」の集合体。
 - ・日本では大宝律令のなかに「里は五町で三〇〇歩」とでてくる。
 - ・現在の日本では、長さの単位「一里」を三・九キロメートルとしている。
 - ・集落を示す言葉として「古里」「里人」「人里」など、距離を示す言葉として「一里塚」「七里ヶ浜」「九十九里浜」などと使われている。
 - ・ここでは「里」は「ひとごと」「ムラ」「集落」などの意で使っている。
- ### ② 「沼」とは？
- ・「沼（ぬま）」とは、定期的に冠水する低地（湿地）の一部を指す言葉。
 - ・一般的には深さ5m以内の水域で、イネ科のヨシやスゲなどの植物が周辺を占有することが多い。
 - ・利根川、渡良瀬川という二つの河川に挟まれた館林地域の地形は、標高の低い「洪積台地」と河川堆積物と考えられる「沖積低地」からなる低地帯で、湿地や中小の沼が数多く所在している。

③ 「里沼」とは？

- ・人間活動である「暮らし（生活）」は、自然が作り上げた「大地（地形）」の上で行われてきた。
 - ・地形や地理などの人間を取り巻く自然が作り出した環境は、人間の行動範囲を規定するが、「生活の場」そのものでもある。
 - ・人間は集団行動を行う動物で、「血縁」や「地縁」といった様々な要素をもとに集まり行動することによって、「ムラ」や「社会」を作り長い間生きてきた。
 - ・「低い洪積台地」と「低湿地帯」という大地をベースに、この地域の人々は、沼と関わりあいながら暮らし、特有な歴史や文化、風土をつくりあげてきた。
 - ・こうした「沼」と「人間活動」の関わりを示す所産を、ここでは日本の社会に根付いている「里山」になぞらえて、「里沼」と呼ぶことにする。
- ### ④ なぜ館林の沼は残ったのか？
- ・沼の大規模な干拓事業は江戸時代の新田開発から始まり、明治時代以降の耕地整理・土地改良、近代以降の都市化（宅地化・工業団地造成）など、耕地の拡大と生産力の強化のため、平野にある日本の沼の多くは消滅したり、面積を縮小したりするなど、原風景を保つ沼が失われてきた。
 - ・館林市周辺においても、江戸時代中期に大輪沼（明和町）が消滅し、昭和五十一年（五十五年）の土地改良で板倉沼（板倉町）が消滅した。
 - ・館林市内の沼が残ってきた理由として、比較的小規模な沼が多かったことから、江戸時代の新田開発では、沼を干拓するよりも河川の付け替えによって治水対策を行い、広大な耕地を確保することができたことがあげられる。
 - ・さらに、茂林寺沼は寺領であったこと、城沼は藩領で館林城の要害であったこと、多々良沼は周辺の村々の水源となっていたことも、残されてきた理由と考えられる。

③ 「館林」ってどんなところ？

① 田山花袋の見た館林

- ・私の大きくなった町は平野の中の播鉢すりばちの底のようなどころにあつた。」
 - ・沼には追憶ついでが沢山ある。」
 - ・城址はのちには私たちの遊び場所となつた。」
 - ・「館林は製粉が出来、汽車が出来、モスリンが出来てから、非常に賑にぎやかかになつた。」
- （「幼なき頃のスケッチ」より）
（「幼なき頃のスケッチ」より）
（「幼なき頃のスケッチ」より）
（「東武鉄道」より）

② 地形や地理、自然的側面から見た館林

- ・館林は関東地方のほぼ中央部、関東平野の北辺部、群馬県の東南部に位置している。
- ・「鶴舞うかたちの群馬県」でいえば、ちょうど「鶴の頭」の部分にあたる。
- ・群馬県・栃木県・埼玉県の県境に近く、利根川と渡良瀬川に挟まれたところにある地域。
- ・東京から鉄道の特急列車で約一時間、車では高速道路利用で一時間三〇分ほどの距離にある。
- ・私たちが暮らす館林の大地は全て平野で山地や丘陵は無く、今からおよそ一万年以前にできた洪積台地（関東ローム層で覆われた台地）とそれ以降にできた沖積低地（洪積台地を刻んだ谷に河川などにより運ばれた堆積物が溜まる低地）の時代の違う二つの平野地形でできている。
- ・標高は海拔一四〇三三m程で、「山国」としてイメージされる群馬県内では最も標高が低い地域。
- ・市内には、城沼や多々良沼、茂林寺沼など池沼や湿地が多く所在し、低地帯の景観を呈している。

- ・沖積低地にある池沼や湿地帯では、葦原が広がり、水辺や湿原を好んで生育する動植物が多く見られる。
- ・人が住み集落が営まれてきた台地には、平地林や雑木林、社寺林が広がっている。

基礎データ・参考資料・関連事項

- 市域の広さ 東西約一五・五キロメートル、南北約八キロメートル、面積は六〇・九七平方キロメートル。
- 東経一三九度三二分四秒、北緯三六度一四分三〇秒。
- 市役所は海拔二〇・一m、最高標高は三三・六m。
- 館林に所在する沼：城沼（古城沼を含む）・多々良沼・近藤沼・茂林寺沼・蛇沼など。

③ 歴史や文化、風土的側面から見た館林

館林の原始古代

- ・今からおよそ三万年前以降の旧石器時代に大型動物を追いかけて館林にやってきた旧石器時代人は、見晴らしの良い高台で、狩に使う石器を作りながらキャンプ生活をしていたようで、沼や水辺は猟場としてあつたと考えられている。
- ・縄文時代には、沼の周りの日当たりのよい高台にムラ（集落）をつくり、低地や沼で食料や水など生活の糧を得ていた。
- ・水稲栽培が伝わってきた弥生時代の人たちは、谷頭や湿地を利用し、細々と水田耕作を行っていたと考えられる。
- ・古墳時代の人たちは、沼や川などを境に、小さなクニ（国）を形成しながら、ヤマト王権による国家成立のなかに組み込まれていったと考えられている。
- ・三世紀頃に浅間山が、六世紀頃に榛名二ツ岳が噴火し、火山灰がこの地域にも降り積る。沼では噴火後に環境の変化が見られる。
- ・古代になると、この地域は大荒城評（おおあらかきのこおり）や於波良岐（おはらき）と呼ばれるようになる。

「アラキ」には、新たに開発されることが可能な場所という意味があり、大河川に挟まれ、大小の沼が点在するこの地域には、人の手が入らない場所が広がっていたことを想像させる。

・「邑楽郡」には池田（イキタ）、疋田（ヒキタ）、八田（ヤタ）、長柄（ナガラ）の四郷があった。うち三つには「田」という字がつかわれている。

・万寿二年（一〇二五）に「寶日向」が多々良沼に来て製鉄を始めたという話が伝わっている。

・天仁元年（一一〇八）に浅間山が噴火し、この地域にも軽石が降り、河川や沼の環境に影響を及ぼす。

館林の中世

・中世になると藤原秀郷の流れをくむ佐貫氏が力をつけ、利根川沿いや渡良瀬川沿いに開発されたこの地域を所領し、佐貫荘と呼ばれるようになる。

・佐貫氏は、鎌倉幕府の御家人（武士）で、この頃関東では源氏や平氏、鎌倉幕府、北条執権、御家人の身内どうしの確執などが原因で戦乱が続く。

・室町時代になっても、南北朝の対立や鎌倉公方と関東管領の対立など、東国の守護や国人を巻き込んだ戦乱が続き荒れた。

・応永三十三年（一四二六）茂林寺が創建される。

・関東地方では、享徳三年（一四五四）に起きた享徳の乱を境に戦国の時代へと向かう。

・享徳の乱以降、関東地方では覇権を争う戦いが激しくなり、この地域では、舞木氏や赤井氏などが台頭してくるなかで館林城が築かれる。

・この頃、大谷休泊によって大谷原が開発され、用水堀や植林、農地の造成などを通して農業生産の拡大が図られたという。

・上杉氏、武田氏、北条氏などの攻防のなかで館林城は境目の紛争に巻き込まれていく。

館林の近世

・天正十八年（一五九〇）豊臣秀吉が小田原で北条氏を滅ぼすと、関東は徳川家康の領地となり、徳川四天王の一人「榊原康政」が一〇万石で館林城主となる。

・城主となった康政は利根川や渡良瀬川の築堤を始め、城や町の整備、新田開発などを行い、近世城下町としての「館林」の基礎を作る。

・江戸時代には、榊原家、徳川家、松平家を始め七家の大名が館林を治め、館林はこの地域の政治・経済・文化の中心地となる。

・石高によって領地範囲の違いはあるものの、各城主は新田開発など領地の生産性を高める政策を多く行っている。

・秋元家が城主の時に明治維新を迎え、約二七〇年間続いた幕藩体制が終焉を迎える。

館林の近代・現代

・廃藩置県によって社会構造は変化し、館林は館林県・栃木県を経て明治九年（一八七六）に群馬県に属する。

・明治政府の進める近代化政策のなかで、地域特有の地場産品などを使った近代産業が興るとともに、鉄道や道路などの交通網が整備され、町が賑やかになる。

・明治以降の近代化政策のなかで、戦争や大水害など人々の暮らしに不安な事象もあったが、昭和二十年（一九四五）に太平洋戦争が終結し、戦後の復興や民主化が図られ、昭和二十九年（一九五四）に一町七村が合併し館林市が誕生した。

基礎データ・参考資料・関連事項

□この地域の歴史や文化などについては、里沼のテーマに合致するもののみを取りあげた。各時代の事柄や資料については『館林市史』の紙面に詳細に紹介されており、もっと詳しく知りたい方は市史を参考にされたい。

2 祈りの沼「茂林寺沼」を歩く

—里沼の原風景を残す茂林寺沼—

(1) 祈りの沼「茂林寺沼」ストーリー

① かつて、河川や沼の水辺には湿地や湿原が広がり、その周りには平地林が見られた。

沼や湿原には、鯉や鮎、トンボなどの水生動物や昆虫、菱や藻などの水草や湿原の植物が生息し、沼辺の平地林は狸や蛇、野鳥などの棲みかとなっていた。このような水とりまく自然環境は、平野の都市部では開発によってほとんど見られなくなっている。

しかし、周辺が宅地化された今も、茂林寺沼にはその原風景が残されている。沼辺にはコウホネ、カキツバタ、ノウルシなど希少種の植物が自生し、関東地方でも数少ない貴重な低地湿原となっている。

② 茂林寺沼には、なぜ今の原風景が残っているのか？

そこには六〇〇年前に開山した古刹・茂林寺の存在がある。沼の畔に曹洞宗の信仰の拠点「祈りの場」が生まれることにより、人々の自然を畏怖する気持ちが高まり「祈りの沼」としての静謐さが受け継がれてきた。いつしか人々は、その沼を茂林寺沼と呼ぶようになった。

そして、寺に伝わる貉（狸）の古潭「ぶんぶく茶釜」のなかで、和尚が貉の化身であったり、狸が茶釜に化けるなど、人と動物とのかかわりが今もユーモラスに語り継がれている。

③ 茅葺き屋根の本堂や山門をもつ茂林寺は、その葺き替えに沼茅（葦）を利用してきた。人々は繁茂する葦を刈ることで沼の生態系を維持し、茂林寺沼は「里沼」として人との共生が保たれてきた。

今も人々の祈りの姿が途絶えることのない寺と、希少な植物の棲みかの沼との共存が図られている。



南から見た茂林寺沼と湿原

(2) 祈りの沼「茂林寺沼」案内のテーマとポイント

- なぜ「茂林寺沼」が「祈りの沼」なのかを理解してもらおう。
- 「祈りの沼」の原風景を知る手がかりが、茂林寺や茂林寺沼にあることから、「祈り」や「願い」につながる物件を確認してもらおうことが大切。
- 茂林寺がなぜ「茶道」や「狸」と関係するのか、それがなぜ「祈り」や「願い」につながるかを想像してもらおうと良い。
- 茂林寺沼がなぜ「里沼」の原風景なのかを理解してもらおうことが重要。
- 茂林寺沼周辺の地形を理解し、茂林寺沼と周辺に住む人々の暮らしが、どうつながっているかを知ってもらおうことが大切。

豆知識①

□茂林寺を始めとするお寺では、「お釈迦様」「観音様」「お地藏様」など色々な仏像があるが、では…

『???お釈迦様と観音様ではどちらが偉い???』

- ※仏像には、如来、菩薩、明王、天部の四グループがある。
 - 「如来」は、修行が終わり悟りを開いた人をいう。釈迦如来、大日如来、薬師如来、阿弥陀如来など
 - 「菩薩」は、如来になろうと修行を積む人をいう。観音菩薩、地藏菩薩、弥勒菩薩、普賢菩薩など
 - 「明王」は、救い難い民衆さえ、力づくでも帰依させようとする人で、密教特有の仏像。
 - 不動明王、愛染明王、孔雀明王、烏枢沙摩明王など
 - 「天部」は、古代インドの神々が仏教に取り入れられたもので、天界に住み仏法を守護する護法善神の人。四天王（持国天・増長天・広目天・多聞天）
毘沙門天、吉祥天、帝釈天、弁財天など
- ※それぞれの仏像の特徴を覚えておくと、お寺に行った時に便利かも…

(茂林寺沼の地図)



(3) 祈りの沼「茂林寺沼」 ストーリーを語る構成文化財

① 茂林寺沼及び低地湿原（県指定天然記念物 自然）

- ・市内の南部にある周囲約一キロメートルの沼と、その周囲に広がる低地湿原。
- ・低地湿原は関東平野に残る数少ないもので、今も自然環境を良好に残す。
- ・貴重種のコウホネやカキツバタなどの水生・湿原植物、トンボなど湿原の貴重な動物が生息し、古刹茂林寺とともに「祈りの沼」の景観を醸し出している。

基礎データ・参考資料・関連事項

- 低地帯である邑楽・館林地域を代表する湿原で、沼と湿原合わせて約五万六〇〇〇平方メートルが県の天然記念物に指定されている。
- ヨシやスゲを中心にカキツバタ、ミソハギなど湿地性の植物が繁茂する草原が特徴である。
- 茂林寺のある場所は洪積台地、茂林寺沼は沖積低地に所在する。
- 茂林寺の近くにあり、寺領であったことから「茂林寺沼」と呼ばれている。
- 茂林寺が開山したのは応永三十三年（一四二六）。それ以前はこの沼はなんと呼ばれたか？
- 比較的狭い区域（コンパクトな区域）で沼を中心に、沼↓湿原↓草原↓森林という自然の様相が観察できる。
- 湿原の主要植物であるヨシやスゲは、かつて周辺民家等の屋根材として使われ、茂林寺や熊野神社の萱場にもなっていた。
- 沼の泥を掘り上げて造った田んぼ（ホリアゲタ・ウキタと呼ばれる）の畔の痕跡が残る。
- 沼の水は台地からの湧水を始め、三方の谷から供給され、茂林寺川を経て「谷田川」に注ぐ。



茂林寺沼及び低地湿原

② 茂林寺（分福茶釜）

（寺院 歴史）

・応永三十三年（一四二六）、茂林寺沼の畔に「祈りの場」として開山した寺院。江戸時代の茅葺屋根の本堂と山門があり、茅は茂林寺沼の葦が使用されてきた。
・貉（狸）の化身である守鶴がもたらしたという茶釜「分福茶釜」が伝わり、明治時代の巖谷小波の童話で全国に知られるようになった。山門前には狸像が並び、境内には童話を伝える巖谷小波の詩碑がある。

基礎データ・参考資料・関連事項

- 曹洞宗（禅宗の一つ）の寺院。山号は「青龍山」、本尊は釈迦牟尼仏、本山は永平寺（福井県）・總持寺（神奈川県）。
- 応永三十三年（一四二六）創建、開山は大林正通。
- 境内には、本堂のほか総門・山門・聖観音菩薩像・茶筌塚・筆塚・守鶴堂・巖谷小波詩碑などがある。
- 天皇の勅願寺で、後柏原天皇の綸旨や江戸時代の館林城主の禁制、大正時代の境内図などが伝えられている。
- 禅宗の寺院として「座禅」や「茶道」との関わりも深い。
- 「分福茶釜」の寺としても有名。分福茶釜の話は「茂林寺縁起」や「甲子夜話」、「新版分福丹頂鶴」の話が基としてある。
- 周囲は社寺林で囲われている。



茂林寺の分福茶釜



巖谷小波の詩碑



茂林寺の本堂（茅葺き屋根）



茂林寺の山門（茅葺き屋根）

③ 茂林寺のラカンマキ (県指定天然記念物 樹木 自然)

- ・茂林寺の本堂前にある樹齢約六〇〇年、樹高一四mの巨木。
- ・茂林寺の開山とともに、葉先が尖っているため魔除けとして植えられ、「祈りの場」となった歴史を伝える。

基礎データ・参考資料・関連事項

- 茂林寺開山の応永三十三年(一四二六)に、本堂向かって左のヒイラギと共に植えられたと伝えられる。
- ラカンマキ・ヒイラギとも、葉先が尖っていることから魔除けとして植えられたという。
- ラカンマキは樹齢の分かっている巨木として、群馬県の天然記念物に指定されている。



茂林寺のラカンマキ



茂林寺沼近くの熊野神社



茂林寺沼のヨシなどを使ってどんど焼きのヤグラを組む



堀工町のどんど焼き

④ 堀工町のどんど焼き (年中行事 民俗)

- ・江戸時代から続く行事で、茂林寺沼近くにある熊野神社の神事として行われていた。
- ・現在は堀工町の地区行事として、毎年一月十五日に近い日曜日に、古いお札やだるまなどを焚いて、一年間の無病息災を祈る。
- ・お焚き上げのヤグラは、茂林寺沼で刈った葦やナスガラなどを積み上げて作られる。

基礎データ・参考資料・関連事項

- 熊野神社は地元の氏神様。
- かつては、熊野神社の境内で行われていたが、現在は「堀工町ふれあい広場」で実施されている。
- 御神火は、熊野神社で採火され、子どもたちの手によって広場まで運ばれる。
- お焚き上げのヤグラは地元保存会の人たちが中心になって組まれる。材料は周辺の竹やぶや畑、湿原から運ばれる。

39 蛇沼及び間堀遺跡出土品

(名勝地・考古資料)

- ・館林市の南部にあり、「祈りの沼」茂林寺沼の東部にある周囲約1kmの細長い沼。
- ・蛇沼周辺には湿原が残り「里沼」の原風景を残すとともに、隣接する台地上には縄文時代から続く間堀遺跡がある。
- ・出土品の縄文土器群は多彩な装飾を持ち、沼辺で生きた縄文人の暮らしと「祈り」の心をうかがい知ることができる。

基礎データ・参考資料・関連事項

- 蛇沼は、館林市南東部にある沼。市立第四中学校の南にある沼で、平成七年（一九九五）に国絶滅危惧Ⅱ種のオニバスの生息が確認された。同中学校生徒や地域ボランティア団体が中心となってオニバス保護を含めた環境保全活動が行われている。
- オニバスは、スイレン科に属する一年生の水草。夏頃に広がる巨大な葉には大きなトゲもあることから「鬼」の名がつけられた。日本では絶滅危惧Ⅱ種に指定されている。悪化する環境や河川改修などによる沼・湿原の埋め立てにより自生地が消滅するケースが多い。土中に残った種子が生育環境の改善により、突然オニバスが開花する例もある。
- 間堀遺跡は、縄文時代の遺跡。昭和五十七年（一九八二）に第四中学校建設に際して埋蔵文化財発掘調査が行われ、以後、平成十九（二〇〇七）年（二〇〇七）年にも調査が実施された。確認された住居址はその後田山花袋記念文学館南側に「縄文邑」として復元・公開されていた（現在は滅失）。
- 間堀遺跡出土品は、復元された縄文土器は約八〇個、破片は約一五〇〇点、石器類は約二五〇点のほか、古墳時代以降の土器類が多数確認されている。間堀遺跡出土品の一部は、館林市第一資料館にて展示されている。



蛇沼湿原



間堀遺跡出土品（第一資料館で展示）



オニバスの花



環境学習を行う第四中学校生徒

3 実りの沼「多々良沼」を巡る

— 麦都 館林を支えた多々良沼 —

(1) 実りの沼「多々良沼」ストーリー

- ① 多々良沼とその沼辺に細長く連なる松林。
そこには「たたら」の地名の由来となった古い時代の製鉄の痕跡と、五〇〇年前の開拓者大谷休泊による植林と水堀開削の歴史が刻まれている。
多々良沼は、人々の暮らしを支える生業の場としての「里沼」へと拓かれてきた。
- ② 沼からの用水によって潤された田畑は、米と麦との二毛作が可能となり、江戸時代には館林藩から将軍家へ小麦粉が献上されたように、館林は麦の産地となった。
明治期になると麦を生かした近代製粉業や醸造業が興り、小麦都となった館林では、麦を原料とした麦落雁やうどん、醤油が名産品となった。「里沼」による水と大地の恵みは、多々良沼を「実りの沼」へと進化させ、現代の館林の食品産業の隆興へと結実している。
- ③ 「実りの沼」は漁労の場としても人々の暮らしを支え、鯰の天ぶらや鯉のあらい、鮎の甘露煮など沼の幸を活かした個性ある食文化をもたらした。
長年培われてきた様々な味わいは、里人たちの貴重なたんばく源となり、もてなしや晴れの日の料理として今も暮らしに根付いている。



南から見た多々良沼

(2) 実りの沼「多々良沼」案内のテーマとポイント

- なぜ「多々良沼」が「実りの沼」なのかを理解してもらう。
- なぜ「多々良沼」とよばれるのか、伝説や記録、周辺の地名などと合わせて考えてもらうと良い。
- 地理、地形的な側面から、多々良沼の特徴を理解したうえで、それが、周辺に住む人々の暮らしとどう関わってきたのかを理解することが大切。
- 沼周辺には漁業、林業、農業、工業などの生業なりわいに関わると考えられる場所が多くある。

豆知識②

□多々良沼から水を引いた用水堀「下休泊堀」は、現在「逆川（さかさがわ）」と呼ばれているが、では…

『???「休泊堀」は「用水路」「排水路」のどちら???』

- ※「用水路」は必要な水を供給する水路「排水路」はいらぬ水を流す水路のこと。
- 「用水」＝飲料や灌漑、工業、消火などのために使う水のこと。また、その水を引いたり、蓄えたりするための施設や設備を指すこともある。
- 「悪水」＝水田などからの排水や滞留して作物などに害を及ぼす、必要の無い水のこと。
- 低地帯の館林では、夏は水を供給し「水田」として、冬は水を落として麦作などのために「畑」にする二毛作が発達している。
- 「休泊堀」は、水田耕作に「必要な水」を供給するとともに、畑作のために「必要でなくなった水」を排水する役目も担っている「用・悪水路」と言える。

※下休泊堀は沖積地にある多々良沼から洪積台地に水を供給する用



(多々良沼の地図)

水堀で、低いところ(沼)から高い所(台地)に向かって流れていくように見えることから「逆川」と呼ばれる。

(3) 実りの沼「多々良沼」ストーリーを語る構成文化財

① 多々良沼 (沼 自然)

- ・館林市の西北部にある周囲約七キロメートルの沼で、平安時代に行われた踏鞴製鉄から名付けられたという。
- ・中世の開拓者大谷休泊により多々良沼から用水が開削され、その水で潤された台地では米麦の二毛作が盛んとなり、肥沃な穀倉地帯を育んだ。
- ・この「実りの沼」から採れる鯉や鮒、鯰や鰻などは、里人の貴重なたんばく源となった。

基礎データ・参考資料・関連事項

- 館林市の西北部「日向」に所在する。
- 大泉町方面と邑楽町中野方面から延びてくる谷（低地帯）が合わさる最下流に形成された沼。
- 現在の周囲は約七キロメートル。市内では最大の沼。
- 明治十七年（一八八四）の迅速図での水面積は六二ヘクタール、平成四年（一九九二）時は四二ヘクタール。
- 昭和二十二〜二十三年（一九四七〜一九四八）に北側三七ヘクタールが干拓され農地になる。
- 水深が二m程で、沼底は砂。
- 明治二十二年（一八八九）に刊行された『群馬県邑楽郡町村誌材料』の記述に「萬壽二年（一〇二五）沼の北岸に寶日向踏鞴を設けて鑄造を始む故」（多々良伝説）の記録がある。
- 江戸時代の絵図や資料などに「多々良沼」の記述は見える。
- ハクチョウの越冬地（毎年二〇〇羽前後が飛来）。
- 冬場晴れていれば、東に筑波山、北に男体山、北西に赤城山、西に浅間山と妙義山、南に富士山が望める。



富士山とハクチョウの多々良沼



たたら製鉄のイメージ図

② 多々良沼遺跡（カナクソ）

（遺跡 歴史）

- ・多々良沼北岸にある遺跡で鉄生産地と伝わる。
- ・現在の日向漁港の沼辺では、冬に水位が下がると、「カナクソ（金糞）」と呼ばれる製鉄の時に出された鉾滓こうさいを見つけることができる。

基礎データ・参考資料・関連事項

- 現在の日向漁港周辺に所在する遺跡。
- 日本の伝統的な製鉄法と言われる「たたら製鉄」で鉄を製錬する時に出る金属の浮きカスなどの不純物が固まったもの（鉾滓、カナクソと呼ばれる）が見つかることから、製鉄址であったと考えられている。

- 「たたら製鉄」では砂鉄と木炭を多量に使う。
- 鉄は、農具や武器などの原料となることから、製鉄はその土地の権力者にとって重要な産業。



多々良沼遺跡の鉾滓（カナクソ）



内陸古砂丘と松林



松沼町遺跡の炭焼窯跡

③ 内陸古砂丘

（地形・地質 自然）

- ・利根川が形成した自然堤防の砂層で、太田市南西部から多々良沼東岸まで続く。
- ・砂鉄を豊富に含み、多々良沼の伝説につながる製鉄時の砂鉄や薪などの資源供給地となった。古砂丘斜面の松沼町遺跡からは古代の炭焼窯跡が発見された。

基礎データ・参考資料・関連事項

- 「内陸古砂丘」は内陸部にある古い時代の砂丘という意味。
- 太田市高林から館林市高根町まで延びる堤防状の高まり地形。長さは一三キロメートルにもおよぶ。
- 標高は二五m以上あり、館林市の最高標高である三三・六mもこの砂丘上にある。

- 古い時代の利根川の自然堤防であるとか、砂層を形成する古い時代の砂が風によって運ばれ堤防状に積もったものなど諸説がある。

- 砂丘の上面は、関東ローム層の中部ローム層以降の赤土におおわれており、更新統（約一八〇万年前〜約一万年）の古い砂丘地形と考えられている。

- 砂丘上はアカマツ林となっており、大谷休泊が植林をした防風林と伝えられている。

- 平成十五年（二〇〇三）の松沼町遺跡の発掘調査で、古砂丘の西側斜面を利用した炭焼窯跡が一四基以上確認されており、「たたら製鉄」との関連が考えられている。分析した結果、炭焼窯跡から出土した炭化材はコナラやクヌギの種類で、奈良時代から平安時代のもものと測定された。

4 大谷休泊の墓

(県指定史跡 墳墓 歴史)

・中世の開拓者大谷休泊おおよきゆうぱくの墓。
・戦国時代の館林城主長尾顕長ながおあきながの招きに応じて領内に住み、渡良瀬川からの用水（上休泊堀）と多々良沼からの用水（下休泊堀）を引いて周辺の田畑を潤した。多々良沼周辺の松林は大谷休泊の植林事業によるものである。

基礎データ・参考資料・関連事項

□大谷休泊は大永元年（一五二二）に生まれ、「新左衛門」と称し、最初は平井城（現藤岡市）の城主上杉憲政に仕えた。上杉氏が越後（現新潟県）に逃れた後に館林城主の長尾氏に仕え、領内の成島に住み、大谷原の植林と「上休泊堀」や「下休泊堀」を開削した。天正六年（一五七八）に没したと伝えられている。

□休泊の行った事業である「大谷原」の植林事業と「休泊堀」の開削事業は、関東ローム層で覆われ乾燥した原野を有用な林や田畑などの生産力を持つ土地に変えた開発事業で、この地域では地域開発の恩人として伝えられている。

□墓は北成島町にあり、群馬県の史跡に指定されている。



大谷休泊の墓



多々良沼の水を利用した下休泊堀
(現在の逆川、下流で新堀川となる)



多々良沼組合并縁付村々絵図（館林市立資料館蔵）
江戸時代の多々良沼からの用水路が描かれている。

⑤ 上三林のさわら

(市指定重要無形民俗文化財 獅子舞 民俗芸能)

・館林市南西部の上三林町に伝わる民俗芸能。
・多々良沼からの用水によって二毛作が盛んとなった地域で、江戸時代中期から五穀豊穡と疫病神追払の祭事として行われてきた。
・町内の雷電神社の祭礼に合わせて棒術と獅子舞を奉納しながら地域内を巡行する。

基礎データ・参考資料・関連事項

- 五穀豊穡と疫病神追払いのために行われる「ささら」は、一人立三匹獅子舞である。
- この獅子舞が「ささら」と呼ばれるのは、お囃子で使われる「スリザサラ」という古楽器によるものと考えられている。
- 地元ではささらを舞うことを「ささらをスル」という。
- かつては不作の年にささらは奉納されなかった。



上三林のささら（花棒）



上三林のささら（棒術）



上三林のささら（獅子舞）

⑥ 沼の漁具と日向舟

(漁具 民俗)

・館林市内の沼では、広く網を仕掛けて、舟に乗って集団で行う追い込み漁のほか、ハズ網・ヤス漁などが行われ、さまざまな漁具が生まれた。

・沼によって使用する舟も形が違い、多々良沼の舟は、冬に凍結した氷から舟べりを保護するために一枚板を取り付けており、「日向舟」と呼ばれている。

基礎データ・参考資料・関連事項

□日向漁港は多々良沼で漁労が行われていた頃に、中心となった漁港である。

□浅い水深と砂の沼底の多々良沼では、沼の形状を利用した独特の漁労が行われてきた。特に冬場は水位が下がる。

□多々良沼で行われていた漁

・「ハズ網漁」 Ⅱハズ網を使った見取り漁で、水面の上から見える魚を、ハズ網という網を上から被せて採る漁法。

・「ウナギカキ漁」 Ⅱ先端に「逆返し」のついた鉄製のウナギカキというヤスで沼底を探り、「返し」に引っ掛けてウナギを採る漁法。

・「追い込み漁」 Ⅱ数隻の船で船べりや水面を叩きながら仕掛けた網に魚を追い込む漁。多々良沼の冬の風物詩になっていた。

□水深が浅いことから、冬場には水面が凍る多々良沼では、舟べりを氷から守るために一枚多く板をはりつけた、他の沼のものと比較して、幅のやや狭い、舟底の浅い「日向舟」という和舟が用いられていた。



昭和30年頃の多々良沼の追い込み漁



多々良沼などで使った漁具(館林市立資料館蔵)

令和3年度「里沼」構成文化財追加認定

40 近藤沼（ホリアゲタ）

（名勝地）

・館林市の南西部にある周囲約2.5kmの沼で、明治時代に造成された櫛の歯状の水田と水路が存在した。
 ・沼底の土を掘り上げて造ったことから「ホリアゲタ」（別名キロコボリ）と呼ばれ、多々良沼同様「実りの沼」として暮らしを支えてきた。
 ・沼辺に建つ「吉田丑五郎翁之碑」がその歴史を伝え、周辺の農地に名残の水路を見ることが出来る。

基礎データ・参考資料・関連事項

□近藤沼は、古くは八重笠沼（太田市）・板倉沼（板倉町）・多々良沼・城沼とともに、東毛の五沼と称された。沼の南側は微高地の自然堤防地形、北側は水田のある湿地帯になっている。館林市の「近藤」は、慶長十九年（一六一四）に領主が近藤秀用（徳川家臣・井伊家の元寄騎）となつて以来、近藤と呼ばれるようになり、この沼も「近藤沼」と呼ばれるようになったと考えられる。

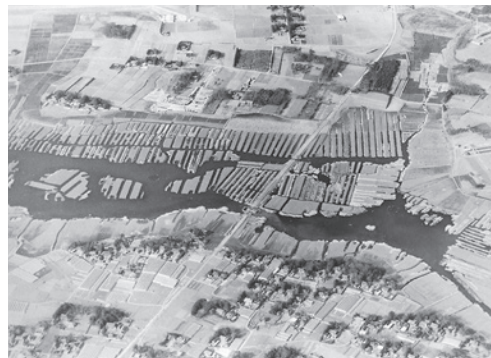
□特徴的な景観である「ホリアゲタ」（掘り上げ田）は、岸から縦に細長い溝（クリーク）を掘り、掘った際に生じた泥土を溝と溝の間に積み上げて水面より上に地面を作り、田にする農法。干拓や埋立が困難な沼地で田を作り、さらに溝により水路を確保するための独特の農法である。地元の一部ではホリアゲタの溝を「キロコボリ」と呼ぶ。ホリアゲタ造成に尽力したのが、下三林村民吉田丑五郎（一八三九～一九〇一）である。丑五郎は明治二十二年（一八八九）と明治三十年（一八九七）に近隣の村と協力して近藤沼の開墾を行った。丑五郎は公共心が強く、産業発展と庶民幸福を願い、荒廃していた近藤沼を私財を投じて開発し、その生涯を捧げた。このとき造成されたのがホリアゲタである。

□昭和四十六年（一九七一）、沼の中央を南北に通る農免道路が完成した。これを機に、新時代の農業経営に対応できる基盤整備を必要とする声があがり、地盤造成・圃場整備・用排水分離・乾田化を目指す

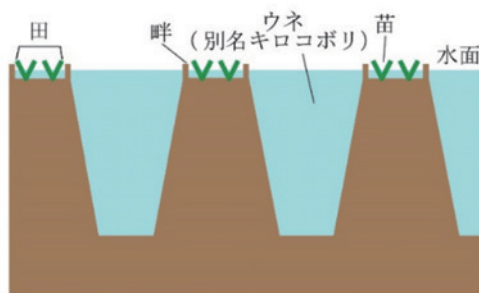
す開発が計画された。埋め立て・整地の採土地は沼部とし、灌漑は用水源を近藤沼として、揚水機場の設置と水域全てのパイプライン化が図られた。昭和五十年（一九七五）に着工し、五十六年に竣工した。この整備後、近藤沼の周りには公園が整備され、釣り場として多くの釣り人が訪れている。近年、バーベキュー場も整備された。



近藤沼（中沼）



上空からみた近藤沼のホリアゲタ



ホリアゲタ様式図



吉田丑五郎翁碑

4 守りの沼「城沼」を周る

―館林城と躑躅ヶ崎を守ってきた城沼―

(1) 守りの沼「城沼」ストーリー

① 五五〇年前、周囲五キロメートルの東西に細長い城沼を天然の要害として館林城が築かれた。城沼は館林城の建つ台地を取り囲む外堀の役目をし、武将たちにとって「守りの沼」となった。

沼によって守られた堅固な城は、近世になると江戸を守護する要衝として、徳川四天王の榊原康政や、五代将軍となる徳川綱吉の城となり、守りを固めるため城下町を広げ、その周囲に水を引き入れ、堀と土塁で囲った。

② 「守りの沼」には、二つの伝説が生まれた。一つは龍神伝説である。沼に人を寄せ付けないため、城沼は沼の主龍神の棲む場となり、城下町にはその伝説を伝える井戸が残る。もう一つはつつじ伝説である。

今から四〇〇年程前、「お辻」という名の女人が龍神に見初められ、城沼に入水した。それを悲しんだ里人は沼が見える高台につつじを植え、その地を「躑躅ヶ崎」と呼んだ。

歴代の館林城主はそこにつつじを植え続け、花が咲き誇るようになった高台を築山に城沼を池に見立てた雄大な回遊式の大名庭園を造り上げた。

城主によって守られてきた躑躅ヶ崎は「花山」とも呼ばれ、花の季節には里人たちにも開放された。

③ 明治維新後の近代化は、「守りの沼」を大きく変貌させた。江戸時代に禁漁区となつて人を寄せ付けなかつた城沼は、里人たちに開放されて漁労や墾田、渡船などが営まれ「里沼」としての歴史を歩み始めた。



城沼（西から東を見た風景）

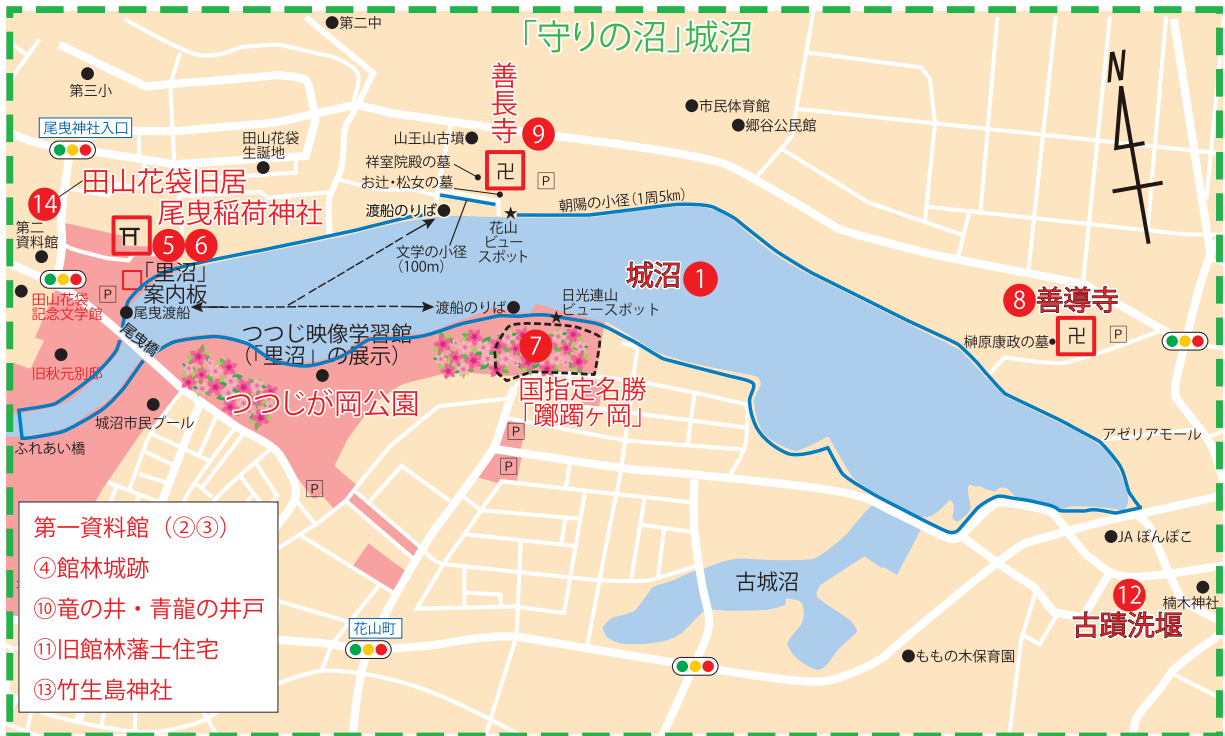
(2) 守りの沼「城沼」案内のテーマとポイント

- なぜ「城沼」が「守りの沼」なのかを理解してもらう。
- 館林城の外堀、館林城に関わる沼なので「城沼」と呼ばれるが、館林城が最初に記録に登場するのは文明三年（一四七一）。
- では、城ができる前は何と呼ばれていたのか？
- 館林城の縄張りや構造物の配置などを知ってもらうことも大切。
- 「伝説」と「歴史」は違うことを理解しておくことが大切。
- 沼がどのように形成されたかに想いをはせることも必要。

豆知識 3

□ 館林を治めた城主として榊原康政や徳川綱吉は有名だが、では…
『??他にはどんな城主がいるか??』

- ※江戸時代に館林を治めた大名家は七家、城主は一七人
 - 榊原（さかきばら）家（康政・康勝・忠次）
期間 天正十八年（一五九〇）～寛永二十年（一六四三）
 - 大給松平（おぎゅう・まつだいら）家（乗寿・乗久）
期間 正保元年（一六四四）～寛文元年（一六六一）
 - 徳川（とくがわ）家（綱吉・徳松）
期間 寛文元年（一六六一）～天和三年（一六八三）
 - 越智松平（おち・まつだいら）家（清武・武雅・武元・武寛・斉厚）
期間 宝永四年（一七〇七）～享保十三年（一七二八）
延享三年（一七四六）～天保七年（一八三六）
 - 太田（おおた）家（資晴・資俊）
期間 享保十三年（一七二八）～延享三年（一七四六）
 - 井上（いのうえ）家（正春）
期間 天保七年（一八三六）～弘化二年（一八四五）
 - 秋元（あきもと）家（志朝・礼朝）
期間 弘化二年（一八四五）～明治四年（一八七二）
- ※詳しくは『館林市史・資料編3』を参照。



(3) 守りの沼「城沼」 ストーリーを語る構成文化財

① 城沼 (沼 自然)

- ・ 館林市中央部にある、周囲約五キロメートルの東西に細長い沼。
- ・ 西岸に館林城が築かれ、江戸時代は人を寄せ付けない「守りの沼」となっていた。
- ・ 南岸に名勝「躑躅ヶ岡」があり、北岸には「つつじ伝説」を伝える善長寺がある。
- ・ 春はつつじ、夏は花ハス遊覧を楽しむことができ、沼辺を周遊する「文学の小径」や「朝陽の小径」では、四季折々の景観を見ることが出来る。

基礎データ・参考資料・関連事項

- 館林市の市街地を流れる「鶴生田川」の川幅が広がった部分にある沼。
- 邑楽・館林台地（洪積台地）を削ってつくられた谷にできた沼で、現在の周囲は五キロメートルほどある。
- 「館林城」はこの沼を天然の要害として築城された。
- 江戸時代には城のある「館林町」と周辺の各村の境界になっていた。
- 周囲には館林城に関わる場所が多く所在している。
- 江戸時代の記録には「石垣沼」とも書かれている。



邑楽郡館林全図（明治時代初期の城沼全体と館林城・城下町を描いた図）
（館林市立資料館蔵）

2 封内経界図誌（県指定重要文化財 絵図 歴史）

「封内経界図誌」は、安政二年（一八五五）に館林城主秋元志朝によって作成された領内五二か村の色彩村絵図。
 ・村ごとに土地利用が色分けされ、江戸時代の沼の形が一目でわかる。
 ・河川や田畑、集落の範囲も描かれ、人々の暮らしと沼との関わりを知ることができる。

基礎データ・参考資料・関連事項

- 江戸時代の最後の城主秋元志朝によって編纂された館林領内の地誌で全四冊からなる。
- 当時の館林領の五二か村内の耕地名や田畑の面積、石高や寺社、構造物、林野の様子などが、文章と絵図で詳細に記録されており、江戸時代の終わり頃はこの地域（館林領内）の状況を知ることができる第一級の資料。
- 群馬県指定重要文化財、館林市第一資料館に収蔵されている。



封内経界図誌 羽附村絵図に描かれた城沼



封内経界図誌 堀工村絵図に描かれた茂林寺沼など

3 上毛館林城沼所産水草図（市指定重要文化財 絵画 歴史・自然）

「上毛館林城沼所産水草図」は、江戸時代末（一八四五年）に描かれた巻物で、当時の城沼に生息していた水草などを描いた彩色譜。
 ・オニバス、ジュンサイなど一二種類の花や藻などが見られ、今は消滅した城沼の動植物を知ることができる。

基礎データ・参考資料・関連事項

- 館林市指定重要文化財、館林市第一資料館に収蔵されている。
- 弘化二年（一八四五）の銘がある。
- 描かれている植物はオモダカ・オニバス・フトイ・ハス・ヒルムシロ・ミズヒキモ・アサザ・ガガブタ・ヒシ・ジュンサイ・タヌキモの一二種類の水草、他に魚と蛙。



上毛館林城沼所産水草図

4 館林城跡（三の丸土橋門・城沼墾田碑）

（市指定史跡 城跡 歴史）

・館林城は城沼を要害とした城で、沼に突き出した台地の地形を巧みに利用して造られた。
・三の丸には江戸時代の土塁が残り、復元された土橋門と一体となって城の面影を伝える。また、明治維新後の旧藩主による城沼開拓に関する記念碑がある。

基礎データ・参考資料・関連事項

- 城沼に西側から突き出した洪積台上に築かれた平城で、城の中心部である城郭は、東から本丸・二の丸・三の丸と並ぶ連郭式の城。
- 館林城が歴史資料に初めて登場するのは文明三年（一四七二）で、『松陰私語』という史料には、城沼を天然の要害とし、三方を湖水に囲まれた長く突出した舌状台地の上に築かれていた様子が記録されている。
- 城の構造は、本丸・二の丸・三の丸・南郭・八幡郭を城郭中心部とし、これを囲うように外郭・稲荷郭があり、さらに武士の居住区である総郭がある。
- 城下町は、大手門と堀を隔てて西側の洪積台地上にあり、城下町の全体を堀と土塁で囲うという大規模な総構えの城である。
- 現在に残されている城絵図には城郭部が細かく分かれた榊原徳川時代（前期館林城）の城絵図と、細かく分かれていない越智松平秋元時代（後期館林城）のものが見られる。
- 城沼墾田碑は明治三十六年（一九〇三）建立。明治期に秋元氏が土族授産事業で沼周辺の開発事業を記念した碑。
- 土橋門は昭和五十八年（一九八三）に発掘調査をもとに復元された三の丸の通用門である。



館林城跡（三の丸土橋門）



三の丸にある城沼墾田碑

5 尾曳稲荷神社

(神社 歴史・伝説)

・尾曳稲荷神社は城沼を望む台地上にあり、館林城築城の白狐縄張り伝説に由来する。

・城の鬼門(東北)となる稲荷郭に位置し、館林城の鎮守となった。
・境内には館林城改修で奉納された手水鉢や、城沼の景観を詠んだ館林出身の文豪田山花袋の歌碑がある。

基礎データ・参考資料・関連事項

- 館林城の稲荷郭に鎮座する稲荷社で、尾曳伝説(白狐縄張り伝説)に繋がる館林城の守護神。
- 所在する方角は本丸の鬼門の方角にあたる。
- 祭神は、「倉稲魂命」。併せて「響田別命」「素戔鳴命」「日本武尊」を祀る。



尾曳稲荷神社

- 拝殿には、館林城絵馬・明治戊辰戦争凱旋絵馬・同磐城進撃絵馬(いずれも市重要文化財)の絵馬や、秋元泰朝所用甲冑(市重要文化財、館林市第一資料館に保管中)が奉納されている。
- 境内や参道には徳川綱吉ゆかりの手水鉢(寛文五年奉納)や館林城主が奉納した石灯笼、田山花袋歌碑などがある。

6 館林城絵馬

(市指定重要文化財 絵馬 歴史・民俗)

・幕末の館林の浮世絵師北尾重光が、館林城と城沼を描いた極彩色の絵馬。

・明治六年(一八七三)に尾曳稲荷神社に奉納された。城沼が鮮やかな青色で塗られ、城の建物が沼に浮かぶように描かれ、「守りの沼」を鳥瞰することができる。

基礎データ・参考資料・関連事項

- 明治六年(一八七三)連雀町の末廣屋佐平ほか十二人の商人が北尾重光に描かせ尾曳稲荷神社に奉納した絵馬で、館林城の中心部(城郭)と城下町の一部、城沼とその周辺を極彩色で描いている(縦九七センチメートル・横一二〇センチメートル)。
- 館林城は、明治七年(一八七四)に焼失しており、焼ける直前の城の縄張りや構造物を知る手がかりとなる。



館林城絵馬

7 躑躅ヶ岡（躑躅）へつつじが岡公園

（国指定名勝 庭園）

- ・城沼南岸にあるツツジの名勝地。
- ・城沼に入水した女人「お辻」を偲んでツツジが植えられた伝説があり、歴代の館林城主の保護のもとで、回遊式の大庭園となった。
- ・樹齢八〇〇年を超えるヤマツツジやキリシマツツジの古木群など約一万株のツツジが植えられ、城沼と一体となった景観は「花山」と呼ばれ親しまれている。

基礎データ・参考資料・関連事項

- 城沼の南岸の洪積台地に所在する全国に類を見ないツツジの名園。
- 江戸時代の古文書などにも城主の移植（増殖）や花見の記録があり、江戸時代から続く大名庭園で、ツツジの咲き誇る景観は、昭和九年（一九三四）に国の名勝に指定されている。
- 花が咲き誇る様子から、地元では「花山」とも呼ばれている。
- 近世館林城主である榊原氏が十七世紀初めにこの地にツツジを植えたのが起源という話が伝わる。
- 「躑躅ヶ崎」の地名は榊原康政の館林入封以前の古文書等にもみられることから、それ以前からツツジが自生していたと考えられる。
- 明治時代になって一時期荒廃するが、明治十三年（一八八〇）群馬県令であった「楫取素彦」の来訪以来、歴代郡長により復興事業が行われ、明治十八年（一八八五）に復興開園式が挙行され、明治十九年には当時の皇后、皇太后の行啓があった。
- ヤマツツジ系、オオヤマツツジ系、キリシマツツジ系、リュウキユウ系など豊富な種類のツツジが植えられており、樹齢六〇〇年を超えるといわれる巨樹や古木も多い。
- 四月～五月の花のシーズンには全山燃えるがごとく赤く咲き誇り、その景観は圧倒的である。



城沼に映るつつじが岡公園



つつじが岡公園のヤマツツジの古木群

□園内には「躑躅岡公園記」や「大谷休泊紀功之碑」「行啓記念碑」をはじめ句碑や記念碑も多く建てられており、その歴史や素晴らしさを伝えている。

⑧ 善導寺(榊原康政の墓) (墓所は県指定史跡 寺院 歴史)

- ・城沼北東岸にある、近世初代城主榊原康政の菩提寺。
- ・榊原康政は、沼に面した館林城をより堅固な城にするため台地上に城下町を整備し、周囲の低湿地を開発して治水・利水事業を進め、「守り」を一層固めた。
- ・境内には康政をはじめとする榊原家の墓所があり、城と城沼の歴史を物語る。

基礎データ・参考資料・関連事項

- 城沼の北東岸の楠町に所在する浄土宗の寺院。
- 創建は和銅元年(七〇八)、開基は行基とされ、山号は「終南山」、院号は「見松院」、本尊は阿弥陀如来。
- 本山は知恩院(京都府)・増上寺(東京都)、関東十八檀林の一つ。
- 近世館林城初代城主「榊原康政」の菩提寺で榊原家の墓所(香花所)があるとともに、徳川家ともゆかりの深い寺である。
- 元々は下戸張(外加法師)にあったが、文禄二年(一五九三)に榊原康政の館林城下町建設に伴って城下の「谷越町」に移転、さらに館林駅前広場の整備に伴って昭和六十年(一九八五)に現在地(楠町)に移転した。
- 本堂裏に榊原家の墓所があり、群馬県の史跡に指定されている。
- 石柵に囲われた榊原家の墓所には、向かって左から「南直道(康政家臣・殉死者 宝篋印塔)」「榊原康政(近世館林城初代城主 宝篋印塔)」「大須賀忠政(康政長子 五輪塔)」「榊原康勝(榊原二代 五輪塔)」「花房氏(康政側室 宝篋印塔)」の五基の墓石と石灯笼が並んでいる。
- 参道南側の庭園内には榊原家の次の城主「松平(大給)乗寿」の無縫塔も所在している。



榊原康政の墓



善導寺の山門

9 善長寺（祥室院殿の墓、お辻・松女の墓）

（祥室院殿の墓は市指定史跡 寺院 歴史）

- ・城沼北岸にある寺院で、沼の対岸に名勝「躑躅ヶ岡」がある。
- ・境内にはツツジを愛でたという榊原忠次の母「祥室院殿の墓」や「つつじ伝説」を伝える「お辻・松女」の供養塔がある。
- ・ツツジの季節には、対岸のつつじが岡を結ぶ渡船が運航される。

基礎データ・参考資料・関連事項

- 城沼北岸の当郷町に所在する曹洞宗の寺院。
- 開創は大永三年（一五二三）という。山号は「巨法山」、本尊は地藏菩薩。
- 本山は永平寺（福井県）・總持寺（神奈川県）。
- 「お辻伝説」ゆかりの寺で、榊原家とも縁が深い。
- 戦国時代の赤井氏や長尾氏の攻防に関わる寺伝が伝わる。
- 本堂西、観音堂北にある「祥室院殿の墓」は館林市指定史跡。
- 祥室院殿は関宿城主松平康元の娘で大須賀忠政（榊原康政の長子）の室。その子「忠次」が榊原家三代を継いだ。忠政の没後は菅沼家に再嫁し膳所（滋賀県）で亡くなったが、忠次は菅沼家に分骨を請い、「祥室院殿」が好きであったというツツジの見える善長寺に墓を建てたという。
- 本堂南前には「つつじ伝説」に関わる「お辻」と「松女」の墓もある。



善長寺と城沼



お辻・松女の供養塔



榊原忠次の母祥室院殿の墓

10 竜の井・青龍の井戸

(井戸 歴史)

・城下町に残る城沼に関わる井戸。
・竜の井は城下町にあった時の善導寺の境内にあり、女人の姿をした城沼に棲む龍神の妻が、寺の説話を聞いて井戸に姿を消した伝説が残る。

・竜の井と城沼にはもう一つの青龍の井戸があり、徳川綱吉が館林城主の時に、この井戸から女官姿の清瀧権現が姿を現したといわれる。

・井戸の水は霊水として珍重されてきた。

基礎データ・参考資料・関連事項

□「竜の井」は東武鉄道館林駅東口の近く、「歴史の小径」の脇に所在する井戸で、元は館林城下町の南西部にあった善導寺の参道脇にあった。

□善導寺は神原康政が城下町を整備するにあたって、城下の谷越町に移転した寺である(善導寺の項参照)。

□寺の落慶法要に際して、前記のような伝説が伝えられている。

□駅前広場の整備に伴って、善導寺は現在地(楠町)に移転したが、この井戸は現地に残され整備された。井戸の側にあるイチヨウの木も善導寺がここにあった頃からの木である。

□「青龍の井戸」は駅前通り沿いの「清龍神社」の境内にある徳川綱吉ゆかりの井戸である。

□江戸時代には旧福寿院(廃寺)の境内で、延宝四年(一六七六)に突然に清水が吹き上がり、井戸の中から清龍権現が姿を現したという。

□井戸の水は「延命長寿の霊水」として崇められ多くの参拝者があつたと言い、綱吉の生母桂昌院が脇に清瀧権現社を再建し、綱吉が一〇石の朱印を寄進したという。

□井戸を囲う石(井戸側)に江戸時代の年号(天和三年へ一六八三)

が
残
さ
れ
て
い
る。

□「竜の井」「青龍の井戸」「竹生島神社の古井戸」「城沼」がつながっており、龍神が出入りしていたという伝説もある。



龍神のイメージ図



竜の井
(かつての善導寺境内)



青龍の井戸と清龍神社

11 旧館林藩士住宅 (市指定重要文化財 住宅 歴史)

・館林城に仕えた藩士の武家屋敷。茅葺屋根の建物で、館林藩士の暮らしの様子を伝える。

・屋根の茅は、沼茅(葦)が主に利用されてきた。明治維新後士族授産による城沼の開発に多くの館林藩士たちがかわつた。

基礎データ・参考資料・関連事項

□旧鷹匠町にある最後の館林藩主「秋元家」の藩士伊王野惣七郎の居宅で、明治期以降は同藩士で伊王野家の親戚にあたる山田家の居宅となる。

□元は、旧館林城下の外伴木にあつたが、平成十二〜十三年(二〇〇〇〜二〇〇一)に現在地(大手町)に解体移築、鷹匠町武家屋敷「武鷹館」の中心施設として整備した。

□木造茅葺平屋建て、部屋を横一列に配置する、間口八間半、奥行四間半、建坪二八坪で、柱間の長さや、間取り、柱配りなどから江戸時代後期の建物と考えられている。

□館林市指定重要文化財。

□伊王野惣七郎は秋元藩士で「留守居役」、家禄は一〇〇石。



旧館林藩士住宅

12 古蹟洗堰

(堰跡 歴史・伝説)

- ・城沼の水を排水し、水位を調節するための堰。
- ・「古蹟洗堰」の由来は、中世の武将楠木正成が敗死し、その首を持って逃げてきた家臣たちがこの堰で首を洗ったという伝説による。堰の脇に石碑と楠木神社が建つ。
- ・現在、城沼の水はこの堰から鶴生田川・谷田川を経由して渡良瀬川に流れ込む。

基礎データ・参考資料・関連事項

- 城沼の沼尻に所在する城沼の水位を管理する堰で、楠木正成伝説に由来する。
- 江戸時代、城沼は藩によって管理されており、魚や鳥を取ることが禁じられた禁漁区であったが、レンコンを掘ることは認められていたという。
- 城沼はその名のとおり、城を守る要害であることから、その水位も藩によって管理されていたと考えられる。
- 近くに、楠木正成を祭神とした「楠木神社」や伝説に出てくる家臣五人が祀られている「五苗塚」と呼ばれる塚（高まり）もある。



古蹟洗堰



古蹟洗堰の碑

13 竹生島神社

(神社 歴史・伝説)

- ・江戸時代は城沼の入り江となっていた場所で、弁天が祀られて「浮島弁天」とよばれ、明治期に城下町の近江商人によって琵琶湖の竹生島神社を勧請した。
- ・境内には昭和初期に行われた城沼耕地整理記念碑があり、低湿地開拓の歴史を物語る。

基礎データ・参考資料・関連事項

- 江戸時代には城下町と城内を隔てる堀が城沼に流れ込む水路となり、この場所は、鶴生田川と水路に挟まれた浮島状になっていた。
- 明治時代には、この「浮島弁天（竹生島神社）」から、躑躅ヶ岡までの渡しがあり、「弁天の渡し」と呼ばれた。尾曳橋ができる以前には、電車で来た観光客は、ここから舟で「花山（躑躅ヶ岡）」に渡った。
- 弁天様 ≡ 弁財天は、仏教の守護神、天部の一部で、日本では神仏習合によって神道の中にも取り込まれ、日本神話の市杵嶋姫命と同一視されることが多い。「七福神」の一人として宝船に乗っているように縁起物であり、元々「川の神」であることから、川や水の近くに祀られることが多い。



竹生島神社

14 田山花袋旧居

(市指定史跡 住宅 歴史)

- ・江戸時代後期に建てられた茅葺き屋根の武家屋敷で、館林出身の文豪田山花袋が明治初期の少年期を過ごした。
- ・花袋は城沼や城跡の風景をこよなく愛し、小説『ふる郷』にはこの家や城沼の景観が克明に描かれている。

基礎データ・参考資料・関連事項

- 田山花袋は、日本の近代自然主義文学を確立した館林出身の小説家。明治四年（一八七二）生まれ、昭和五年（一九三〇）没。
- 花袋が明治十二年（一八七九）〜同十九年（一八八六）の少年時代に住んでいた住宅。
- 木造茅葺平屋建て二二・五坪で五つの部屋があり、秋元家時代の武家住宅でもある。
- 元は、城下の裏宿に所在したが、昭和五十六年（一九八一）に移築整備され、現在は館林市第二資料館内に保存されている。
- 元あった場所（旧居跡）、田山一家が上京する際に売却した証文である「建家売渡証」とともに、館林市の史跡に指定されている。



田山花袋旧居

令和3年度「里沼」構成文化財追加認定

41 長良神社と館林城下町の総構え

(建造物・遺跡)

- ・「守りの沼」城沼を要害とした館林城下町の西北端に鎮座し、周囲には総構えの土塁と堀を利用した水路が残る。
- ・長良神社は中世から館林とその周辺に広く分布し、祭神の藤原長良が水辺に棲む大蛇を退治したという伝説を持つ。
- ・中世・近世の館林地域の沼辺の開発と城下町建設につながる「里沼」の歴史を伝えている。

基礎データ・参考資料・関連事項

□館林市内には代官町や野辺町、赤生田本町など十一か所に長良神社があり、邑楽郡全体では約四十社（長柄神社を含む）存在し、館林・邑楽郡内の特色ある神社となっている。平安初期の都の有力貴族藤原長良を祀っており、その子基経は最初の関白となった。長良神社がこの地域に多いのは、平安末期に館林・邑楽郡内で力を持った佐貫氏が藤原長良とつながる藤原秀郷の子孫とされ、佐貫荘の開発が無事に進むように、また一族の繁栄を願って祀ったためといわれている。長良神社は利根川と谷田川沿いに多く、利根川に住む大蛇を退治して村の娘を守ったという伝説があり、水辺の守り神にもなっている。代官町の長良神社は、中世に瀬戸井（邑楽郡千代田町）の長良神社から勧請され、江戸時代は館林城下町の北西部に鎮座していた。明治六年（一八七三）に郷社となり、明治四三年には城下町の各町内にあつた多くの神社を合祀した。旧暦十月十九日・二十日には恵比寿講祭が行われる。また、本紺屋町にあつた織姫神社が境内社となっている。

□館林城は十五世紀に赤井氏によって築城され、天正十八年（一五九〇）に徳川家康の関東入国に伴って、徳川四天王の一人榊原康政が館林城主となり、城郭・城下町の整備を行った。「館林記」



長良神社(拝殿)



第一中学校北側の総構え(土塁と堀)

によると、町囲の城普請は、文祿二年（一五九三）二月十一日より各村から人足が出て堀を掘って土手を築き、文祿四年十一月までに町囲いが完成したとある。町全体を堀と土塁で囲む形態を「総構え」と呼び、小田原城など全国の主要城郭に用いられている。城下町には五か所の出入口（江戸口・佐野口など）を設け、町内の周縁部には寺社を配置し、防衛上の整備を行った。代官町の長良神社は、町の北西角に位置し、現在も土塁と堀（現在は水路）が残されている。堀の水は城沼に流れ込み、「守りの沼」が城下町全体を守っていたことを知ることができる。

5 「里沼」のもてなし文化に触れる

—「もてなしの心」へと磨き上げられた館林の沼辺文化—

(1) 「里沼」のもてなし文化ストーリー

① 近代化による「守りの沼」の変貌は、城沼と景観を一つにしていた「躑躅ヶ崎」も大きく変えた。それまで城主によって守られていた「躑躅ヶ崎」は、町人や村人たちの努力によって、公園「つつじが岡」として行楽地に生まれ変わり、四〇〇年前に植えられたつつじは貴重な古木群となり、名勝として甦った。

多くの人々が訪れるようになった沼辺には、行楽客を迎え入れるための文化が集約され、「もてなしの心」が芽生えた。

② 近代化によって城下町で成長した製粉・醤油醸造・織物などの会社は、内外の客を迎えるもてなしの場として「つつじが岡」を利用した。東武鉄道の開通と館林出身の文豪田山花袋が記した旅の案内書は、沼辺にある「つつじが岡」と茂林寺へと多くの人々を誘った。さらに「実りの沼」がもたらした名産品の麦落雁やうどんは、手軽な館林土産として広く知られるようになり、里沼の特性を活かした「もてなしの心」が根付いた。

③ 館林の沼に佇むと、赤城山や日光連山、遠くは筑波山・富士山を眺望できる。

「祈りの沼」「実りの沼」「守りの沼」、それぞれの特性を持って、多彩な文化を生み出してきた館林の「里沼（SATO-NUMA）」。それぞれの特性は明治の近代化以降「もてなしの心」へと磨き上げられ、館林の沼辺文化として今も受け継がれている。



城沼の「花ハスクルーズ」

(2)「里沼」のもてなし文化 案内のテーマとポイント

- なぜ、もてなし文化が発達したのかを理解してもらおうことが大切。
- 来訪者へのもてなしの文化は、町の近代化のなかで生まれてきた文化であることを理解してもらおう。
- 館林が城や城下町を中心とした「政治・文化の町」から、農・林・漁・商・工業を中心とした「経済の町」へ転換していったことを意識させる。
- 「里沼」につながる風土や生業なりわいなどの地域の特異性が「もてなし文化」の根底にあることを知ってもらう必要がある。

豆知識 ④

□私たちは主食としてご飯(米)を食べているが、では…

『??』『米』以外で主食になっているものは??』

- ※米を主食とするのは、アジアに多い。
- 主食⇨日常の食事で主となる食べ物、人々が主なエネルギー源とする食べ物で、穀物や芋類が多い。
- 世界の三大穀物と呼ばれるのは「トウモロコシ」「米」「小麦」で、生産量第一位は断トツでトウモロコシ、米と小麦が二位と三位を争っている。
- トウモロコシを主食とするのは中南米やアフリカなどが多く、小麦は中東が発祥であるが、今はヨーロッパ、アメリカなどで主食となっている。
- ※館林地域ではかつては、米より小麦の生産量の方が多かった。「麦穂、稲穂に機音高く」と館林市歌にも謳われている。



(3) 「里沼」のもてなし文化 ストーリーを語る構成文化財

① 躑躅ヶ岡(躑躅)へつつじが岡公園(国指定名勝 庭園) ※再掲

- ・城沼南岸にあるツツジの名勝地。
- ・城沼に入水した女人「お辻」を偲んでツツジが植えられた伝説があり、歴代の館林城主の保護のもとで、回遊式の大名庭園となった。
- ・樹齢八〇〇年を超えるヤマツツジやキリシマツツジの古木群など約一万株のツツジが植えられ、城沼と一体となった景観は「花山」と呼ばれ親しまれている。

基礎データ・参考資料・関連事項

- 城沼の南岸の洪積台地に所在する、全国に類を見ないツツジの名園。
- 江戸時代の古文書などにも城主の移植(増殖)や花見の記録があり、江戸時代から続く大名庭園で、ツツジの咲き誇る景観は、昭和九年(一九三四)に国の名勝に指定されている。
- 花が咲き誇る様子から、地元では「花山」とも呼ばれている。
- 近世館林城主である榊原氏が十七世紀初めにこの地にツツジを植えたのが起源という話が伝わる。
- 「躑躅ヶ崎」の地名は榊原康政の館林入封以前の古文書等にもみられることから、それ以前からツツジが自生していたと考えられている。
- 明治時代になって一時期荒廃するが、明治十三年(一八八〇)群馬県令であった「楫取素彦」の来訪以来、歴代郡長により復興事業が行われ、明治十八年(一八八五)に復興開園式が挙行され、明治十九年には当時の皇后、皇太后の行啓があった。
- ヤマツツジ系、オオヤマツツジ系、キリシマツツジ系、リュウキユウ系など豊富な種類のツツジが植えられており、樹齢六〇〇年を超えるといわれる巨樹や古木も多い。
- 四月～五月の花のシーズンには全山燃えるがごとく赤く咲き誇り、

その景観は圧倒的である。
□園内には「躑躅岡公園記」や「大谷休泊紀功之碑」「行啓記念碑」をはじめ句碑や記念碑も多く建てられており、その歴史や素晴らしさを伝えている。



つつじが岡公園と城沼

② 城沼の渡し舟 (渡し 交通)

- ・城沼の渡し舟は、明治時代の館林駅開業によって、駅からつつじが岡へ向かう最短ルートとして行楽客に利用された。
- ・昭和初期まで竹生島神社脇に「弁天の渡し」があったが、現在は「尾曳の渡し」と「善長寺の渡し」が運航され、七・八月には花ハスクルーズの遊覧船が運航される。

基礎データ・参考資料・関連事項

- つつじが岡公園内の「つつじが岡棧橋」と、尾曳橋のたもとにある「尾曳棧橋」(尾曳の渡し)、善長寺前にある「善長寺棧橋」(善長寺の渡し)をむすぶ渡し舟で、現在は「つつじまつり」と「花ハスクルーズ」の開催期間中に運航されている。
- 城沼の渡しは、明治時代に始まった。明治十七年(一八八四)に「羽附村公園地掛」に「通船願」が出されており、ツツジの花見客のため、善長寺から公園への渡船(善長寺の渡し)が行われていた記録が残る。



昭和30年代の城沼の渡し舟

- 東武鉄道の開通後「館林駅」と「つつじが岡」を結ぶ最短の観光ルートとなった「竹生島神社」からの「弁天の渡し」は明治二十二年(一八八九)に運航が始まっている。その後、道路網の整備や尾曳橋の架橋によって、航路は「弁天棧橋」から「尾曳棧橋」に移り「尾曳の渡し」と呼ばれるようになった。

③ 小室翠雲画「邑楽公園躑躅ヶ岡之図」 (絵画 風景)

- ・館林出身の画家小室翠雲が明治二十八年(二八九五)に描いた彩色画。
- ・「邑楽公園躑躅ヶ岡之図」と題し、城沼とつつじが岡に集う人々が描かれ、明治時代の沼辺景観を見ることができるといえる。

基礎データ・参考資料・関連事項

- 小室翠雲は館林出身の南画家。明治七年(二八七四)生まれ、昭和二十年(一九四五)没。
- 十五歳で田崎草雲に師事する。南画を得意とし、後に文展審査員・帝国美術院会員・帝室技芸員などを務める。
- この絵は絹本着色、大きさは縦五〇センチメートル、横一一四センチメートル。小室翠雲二十一歳頃の作品である。
- 館林市第一資料館に収蔵されている。



小室翠雲画「邑楽公園躑躅ヶ岡之図」

4 旧秋元別邸

(建造物 歴史)

- ・館林最後の城主秋元氏ゆかりの近代和風建築物で、明治末期に城沼を望む館林城の八幡郭に建てられた。主屋には広間があり、離れ座敷に茶室と洋館がある。
- ・庭園には沼で投網する秋元氏の銅像があり、ツツジや花菖蒲・モミジなどが植えられている。
- ・四季を通じて沼辺文化を彩る、館林の迎賓館としての役割を果たしている。

基礎データ・参考資料・関連事項

- 旧館林城の八幡郭に所在する、和館と洋館を組み合わせた外観を持つ建造物。
- 旧上毛モスリン株式会社の専務取締役「杉村熊三郎」の別荘として建てられたといわれる。
- 明治後期の主屋（和館）、昭和五年（一九三〇）移築の離れ（洋館、東京駿河台の秋元家本邸から移築か）、昭和十六年の増築部と建築時期の違う建物が一体化して一つの建物を構成している。
- 明治期の「数寄屋」を意識し、昭和初期に流行した洋館の付いた文化住宅の例。
- 庭には京都八瀬の「八瀬真黒石」と呼ばれる盆栽の水石や「うずまさ」「濡鷺」「みみずく」と呼ばれる石灯笼・秋元神社・秋元春朝投網像などが配置されており、これらの庭石は昭和五年に東京駿河台にあった秋元家本邸の庭「富春園」から移したことを記した石碑が建っている。
- 東側を「城沼」、北側を「旧館林城の入江堀」、南側を「鶴生田川」に囲まれ、鶴生田川を借景とした日本庭園ともども水辺の景観を意識したつくりとなっている。



旧秋元別邸



秋元春朝投網の像

⑤ 正田醤油(株)旧店舗・主屋 〈正田記念館〉

(国登録有形文化財 建造物 歴史)

- ・城下町で江戸時代から商家を営む正田家は、「実りの沼」によって育まれた館林特産の小麦や大豆を材料にして、明治六年（一八七三）に醤油醸造を開始した。
- ・正田記念館は嘉永六年（一八五三）建築の店舗・主屋で、正田家の歴史と醤油醸造に関する資料が展示されている。

基礎データ・参考資料・関連事項

- 東武鉄道伊勢崎線館林駅西口の駅前にある。
- 正田家は江戸時代から米穀商を営む。明治六年（一八七三）に醤油醸造を開始する。
- 正田記念館は江戸時代、米穀商の主屋として建てられた木造瓦葺二階建ての町家で、大正六年（一九一七）に正田醤油(株)の本社屋となる。
- 昭和六十一年（一九八六）、会社創立七十周年を記念して「正田記念館」として整備され、正田家や醤油醸造の資料が展示されている。
- かつては、この建物から古い順に醸造蔵がならんでいた。
- 記念館には、屋敷建築に先だって家相判断を行った時の家相図や棟札も残されている。



正田記念館

⑥ 東武鉄道館林駅

(駅舎 交通・歴史)

・明治四十年(一九〇七)に東武鉄道が川俣かわまたから足利あしかがまで開通した際に開業。現在の駅舎は昭和十二年(一九三七)建築の木造モルタル二階建て瓦葺きで、正面中央に時計をはめ込んだ意匠が特徴。
・明治末期から城沼とつじが岡を訪れる行楽客の玄関口となってきた。

基礎データ・参考資料・関連事項

- 東武鉄道が利根川を渡り足利まで開通したのは明治四十年(一九〇七)。
- 東武鉄道が設立されたのは明治二十八年(二八九五)で、明治三十四年に北千住と久喜間で運転が始まり、明治三十五年に加須、明治三十六年に川俣まで開通している。伊勢崎まで全通したのは明治四十三年(一九一〇)。
- 伊勢崎線全線の電化は昭和二年(一九二七)。また、明治四十五年には佐野線、昭和十二年には小泉線が東武鉄道の経営となった。
- 現在の駅舎は昭和十二年に小泉線を買収した際に新たに建設されたもので、木造モルタル二階建て、瓦葺き寄棟屋根の建物で、正面中央に丸時計がはめ込まれ、その下にアーチ型の飾り窓が二つ配置されているのが特徴である。



東武鉄道館林駅 (左が昭和12年建築の駅舎)

⑦ 創業期日清製粉館林工場事務所〈製粉ミュージアム本館〉

(建造物 工場事務所 歴史)

- ・明治四十三年（一九一〇）に日清製粉館林工場の事務所として建てられた木造二階建ての洋風建造物。
- ・「実りの沼」によって育まれた館林特産の小麦を原料に発展していった日本の近代機械式製粉業発展の歴史を伝える。
- ・創業一〇周年を記念して製粉ミュージアム本館として公開された。

基礎データ・参考資料・関連事項

- 日清製粉(株)は、館林製粉(株)として明治三十三年（一九〇〇）に館林の代官町に創立された会社。
- 東武鉄道が足利まで開通するのに合わせ、館林駅の西口に工場の建設に着手し、明治四十一年（一九〇八）に現在の場所で操業を始めた。
- 明治四十年には、横浜に本社を持つ旧日清製粉(株)と合併、社名を日清製粉(株)とし、本社は東京においた。
- この建物は、明治四十三年（一九一〇）に館林工場の事務所として建てられた建物で、木造二階建て、変形寄棟屋根瓦葺きの洋風建造物。面積は一階部分が一一七・三平方メートル、二階部分が一一五・九平方メートルある。
- 創立七十周年の昭和四十五年に「製粉記念館」として改修され、製粉や日清製粉の歴史資料を展示した記念館として一般公開され、さらに平成二十四年（二〇一二）には製粉ミュージアムの本館として免震構造の建物に改修され公開されている。
- 本工場は平成十四年（二〇〇二）に閉鎖されたが、敷地内には、明治から昭和初期にかけて建設、設置された工場本館や各種製粉機械、倉庫などがあった。現在は、本建物を始めとする一部の建物を除き現存しない。
- 江戸時代からのこの地域の特産である小麦を生かした「近代の地場産業」遺産の一つである。



製粉ミュージアム本館

⑧ 旧上毛モスリン事務所

(県指定重要文化財 建造物 工場事務所 歴史)

- ・明治四十二年（一九〇九）に、城沼を望む館林城二の丸に建設された毛織物工場の事務所で、木造二階建ての洋風建造物。
- ・近代館林の産業発展を支え、城沼の守りを生かした工場群となっていた。
- ・花の季節には、従業員の慰安でつつじが岡へと繰り出した。

基礎データ・参考資料・関連事項

- モスリン（モス綿）とは、元々、梳毛織物そもりものの一種で、古代メソポタミアの首都モスルで織られた薄地の綿布や羊毛生地を指すが、日本では上質メリノ種羊毛を用いた平織り薄手の毛織物をさす（別名メリスとも言う）。
- 館林では明治二十八年（一八九五）に製織に成功し、明治二十九年に「毛布織合資会社」が設立された。
- 明治三十五年（一九〇二）に会社名を「上毛モスリン株式会社」に改め、明治四十二年（一九〇九）に旧館林城二の丸に新工場を移転した。
- 会社はその後、共立モスリン株（昭和二年）、日本毛織株（昭和十六年）、中島飛行機製作所と変遷し、昭和二十二年（一九四七）に神戸生絲株となり、平成五年（一九九三）まで操業を続けた。
- この建物は、明治四十二年、二の丸の新工場建設の時に建てられた上毛モスリン株の本館事務所である。
- 木造二階建て瓦葺き入母屋屋根の洋風建造物で、庇ひさしの出の浅い屋根とペンキ仕上げの下見板の外壁、縦長の上下窓の外観、エンタシスの柱や折階段の手すりの内観などに洋風建造物の意匠が取り入れられているのが特徴である。
- 昭和五十四年（一九七九）に現在地に曳き移転され、復元工事が行われ、昭和五十六年から館林市第二資料館として保存・公開が図ら



旧上毛モスリン事務所

- 昭和五十三年に群馬県の重要文化財に指定され、平成二十三年には「ぐんま絹遺産」にも登録されている。

9 分福酒造店舗〈毛塚記念館〉

(国登録有形文化財 店舗 歴史)

- ・江戸時代から、城下町で酒造業を営んでいた木造二階建ての商家。建物の脇に「龍水の井戸」と呼ばれる井戸があり、かつて「龍水」という銘柄の清酒を醸造・販売していた。
- ・里沼の水源となる良質な地下水により、城下町に酒造業が発達した。

基礎データ・参考資料・関連事項

- 城下の旧本紺屋町にある江戸時代からの造酒屋の店舗であった建物で、町家建築の建物である。
- 分福酒造の創業は文政八年（一八二五）で明治時代は「丸木屋本店」と称していた。昭和二十九年（一九五四）に「分福茶釜」にちなんで造っていた酒の銘柄「分福正宗」に合わせて、会社名を「分福酒造」に改めたという。
- 木造二階建て、瓦葺き、切妻屋根の建物で、店舗部分は、大きさが間口九・二m、奥行は五・七六m。土間と畳敷きの帳場のある店構えとなっており、店の開口部（出入口）は二間。
- 明治三十二年（一八九九）に刊行された「たてばやししちゆうえいりあんないすごろう館林市中絵入案内双六」や、大正時代に作成されたと考えられる「丸木屋本店敷地鳥瞰図」にその姿が見られる。
- 平成十年（一九九八）に本市で初めて国の登録有形文化財となり、保存修理が行われ、平成十一年に「毛塚記念館」として公開された。
- 記念館では、酒造りの道具や前述の「館林市中絵入案内双六」、「丸木屋本店敷地鳥瞰図」が展示されている。また、館林産の酒米を使った地酒「おはらき於波良岐」をはじめとする酒や酒器の販売などを続けている。



分福酒造店舗 毛塚記念館

10 旧館林信用金庫 〈市役所市民センター分室〉

(建造物 金融 歴史)

・大正末期に発足した館林信用金庫の近代建物。昭和九年（一九三四年）建築で、鉄筋コンクリート造二階建て、タイル貼りの外壁や入口の装飾が特徴。

・大正から昭和初期にかけて町の経済発展を担い、沼辺のもてなし文化の原動力となった。

基礎データ・参考資料・関連事項

□館林信用組合（館林信用金庫の前身）は、大正十五年（一九二六年）に地元の産業振興発展のために発足した金融機関で、城下の旧豎町（たつまち）にあった館林消防本部内に開店した。

□昭和九年（一九三四年）にこの建物を新築移転し、昭和二十六年（一九五二年）に信用金庫に組織変更されている。

□この建物は、昭和九年に新築された鉄筋コンクリート造二階建て、陸屋根の建物で、構造はラーメン構造、当時流行していたアールドコ様式を随所に取り入れている。

□外壁より露出しモールディングされた柱や、スクラッチタイルの外壁は印象深いファサードを形成しており、建築当時から目を引く建物であった。

□平成元年（一九八九）に本町一丁目に本店を新築移転するまで館林信用金庫の本店として使われてきた。現在は市所有となり、市民センター分室として活用されている。



旧館林信用金庫

11 旧館林二業見番組合事務所

(国登録有形文化財 建造物 事務所 行楽)

- ・昭和十三年（二九三八）建築の、「二業見番組合」の事務所。
- ・木造二階建ての重厚な瓦屋根が特徴で、二階に芸妓の稽古用の舞台と大広間があり、昭和前期の館林の花街の中枢となった。
- ・花の季節にはつつじが岡で館林の芸妓たちが行楽客を迎え入れ、沼辺のもてなし文化に華を添えた。

基礎データ・参考資料・関連事項

- 「二業」とは「芸妓業」と「料理業」の二つの業を指し、見番はこの二業を取り仕切る役割＝料理屋への芸妓の斡旋や芸妓の管理、玉代の精算などの業務を行っていた所（組合の事務所）である。
- 館林では明治になって料理屋や旅籠屋などが増加してきたのに伴って、明治三十年代には「花街（はなまち）」が生まれたと言われる。
- その後、明治四十年代には、東武鉄道の開通や織物市場の開設、上毛モスリンや日清製粉など近代産業の発展に伴って町は華やかとなり花街も拡大した。
- 最盛期は大正五年（一九一六）頃で、料理屋数は四九軒、芸妓置屋が約二五軒あり、芸妓の数は一五〇人となっている。
- 「二業」の「組合」は明治四十二年（一九〇九）に設置され、最初は城下の堅町に事務所が置かれたが、大正七年（一九一八）には谷越町の青梅天神裏に移転、昭和十三年には肴町へと移った。
- この建物は旧肴町移転後の二業組合の見番事務所で、棟札が現存し、昭和十三年五月十三日に上棟した建物である。
- 構造は木造二階建て瓦葺きの東西に長い建物で、屋根に特徴があり、西側妻面が入母屋、東側妻面が寄棟、正面二階部分には千鳥破風、玄関寄せの屋根は唐破風となっており、建物全体に華やかさを醸し出している。



旧館林二業見番組合事務所



2階大広間の舞台

- 一階は、玄関の床がタイル貼り、玄関に面して板の間の大小の部屋が並ぶ事務所、奥に押入や床の間、違い棚、付け書院のある和室が二部屋ある。
- 二階は舞台の付いた三方に廊下が巡る三六畳の大広間が中心で、その奥に押入や床の間、違い棚、付け書院のある和室が二部屋ある。
- 「見番」として使われたのは昭和十九年（一九四四）までで、その後、日清製粉(株)の所有や教会、商工会議所の事務室などを経て地区の集会所として使われてきた。
- 平成二十八年（二〇一六）に国の登録有形文化財となった。

12 田山花袋関連資料 (田山花袋記念文学館)

(文学資料 ミュージアム 歴史 風土)

・城沼を間近に望む田山花袋記念文学館には、代表作『蒲団』『田舎教師』の初版本などのほか、原稿、書簡、日記、愛用品など、田山花袋に関する資料約一万点が収蔵されている。

・展示室には、小説『ふる郷』の自筆原稿と城沼の古写真があり、沼辺を愛した花袋文学の世界へといざなう。

基礎データ・参考資料・関連事項

- 田山花袋は日本の近代自然主義文学を確立した館林出身の小説家。明治四年（一八七二）生まれ、昭和五年（一九三〇）没。
- 田山家は、秋元家の家臣で、弘化二年（一八四五）秋元家の館林転封に伴って文久二年（一八六二）に山形から館林に移り、館林城下の外伴木に住んだ。家禄は十七俵二人扶持。
- 秋元家臣であった父 十郎は、明治維新後警視庁巡查となり、明治十年（一八七七）の西南戦争で戦死している。
- 明治という新しい時代に生まれた花袋は、時代の移り変わりのなかでほんろうされながら、少年時代（十四歳まで）を館林で過ごしており、大きくなつて文学の道を歩みながらも、少年時代のふるさとの情景や生活を忘れることがなかったことが推測され、作品にも「ふるさと」へ繋がる思い出を綴つたものが多く残されている。
- 代表作としては『蒲団』『田舎教師』があるが、紀行文や随筆、漢詩や和歌も多く作っている。
- 田山花袋記念文学館は旧館林城の本丸の一角に、昭和六十二年（一九八七）にオープンした田山花袋に特化した文学館。
- 収蔵資料のなかには、ともに日本の近代自然主義文学の確立を目指した仲間である島崎藤村・国木田独步や、のちに民俗学を確立した柳田國男らとのやりとりを示す書簡も多く残されている。



田山花袋



田山花袋作『ふる郷』(表紙)

13 川魚料理（鯰・鯉・鮒・鰻料理）（郷土食 民俗 風土）

・沼が点在する館林地域では、昔から鯰・鯉・鮒・鰻などの川魚料理が食されてきた。

・館林のもてなし文化の特徴として、川魚料理をふるまうことがある。中でも、鯰が有名で、天ぷらや小麦粉をあえて揚げたタタキアゲは、この地域を代表する料理となっている。

基礎データ・参考資料・関連事項

□「海なし県・群馬」にある館林は、北を渡良瀬川、南を利根川という大きな川にはさまれた所で、内陸部にありながら標高の低い地域であり、低地帯には中小の河川や沼、湿地が多く存在している。

□こうした地域性のなかで、昔から「タンパク源」として、鯰や鯉、鮒、鰻、追川（オイカワ）鰻（ハヤ）ともいうなどの川魚を食べてきた。

□沼や水路はこうした魚の絶好の漁場であり、前述の魚を捕るために、それぞれの沼や川の形状に合わせて独特の漁法や漁具、舟が工夫されている。

□捕った魚は家庭で消費されるだけでなく、商品としても流通しており、行商人や川魚問屋を通して料理屋などに供給する仕組みもあり、地域には川魚料理を提供する料理屋も多い。

□この地域で食べられる川魚料理の例

- ・鰻（ウナギ） Ⅱ蒲焼き（鰻井・鰻重を含む）、肝吸い
- ・メソ（鰻の幼魚） Ⅱ天ぷら、俱利伽羅焼き（串焼き） など
- ・鮒（フナ） Ⅱあらい、甘露煮、天ぷら、雀焼きなど
- ・鯉（コイ） Ⅱあらい、天ぷら、鯉こく、甘煮など
- ・鯰（ナマズ） Ⅱ天ぷら、タタキアゲ、スッポ煮など
- ・鱮（ドジョウ） Ⅱ柳川、蒲焼き、丸揚げなど
- ・その他 Ⅱ雑漁（ザッコ・小魚）の佃煮、ヌカエビの煮物など



川魚料理（鯉のあらい・鯉こく・鯰のスッポ煮・鰻の蒲焼き・小魚のすずめ焼き）

14 館林のうどん

(郷土食 民俗 風土)

- ・江戸時代に饅飩粉(小麦粉)は館林藩の特産として将軍家へ献上されていた。
- ・「里沼」と利根川・渡良瀬川がもたらす豊富な水資源が小麦栽培に適した肥沃な大地を生み、長い日照時間と赤城おろしと呼ばれるからつ風による乾燥した気候から、うどんの産地となった。
- ・「麦都」館林のもてなし文化に欠かせない名産品である。

基礎データ・参考資料・関連事項

- 館林の地形は時代の違う二つの平野から成り立っている。一つは「赤土」と呼ばれる関東ローム層のある「洪積台地」で今からおよそ一万年以上前に堆積した水分の少ない乾いた土壌であり、もう一つは、洪積台地を削ってきた谷や低い土地に水によって運ばれた土壌が堆積した「沖積低地」と呼ばれる平野で、こちらは、今からおよそ一万年以前以降に堆積した水分を多く含む土壌である。
- この性格の違う土壌は農業生産の面でもみられ、古くから水気の多い沖積低地では水田耕作が、乾燥した洪積台地では畑作が行われてきた。
- 土が肥沃で、冬雨が少なく乾燥した地域では麦の栽培が盛んであるという。
- 安政二年(一八五五)に編纂された「封内経界図誌」(23ページ参照)では、この頃の館林領内の作付面積は畑(三三四二町余)が田(二七八五町)の約一・九倍、石高も畑(二万一六〇七石)が田(二万八八四石)の約一・二倍となっており、いずれも畑の方が多いことがわかる。
- 夏は稲作、冬は麦作を行うことを「二毛作」と言う。二毛作を行うには夏は水田、冬は畑になる耕作地が必要で、高台と低地の比高差の少ないこの地域では、昔から「用水」と「排水」を兼ねた「〇〇堀」と呼ばれる水路の設置が行われてきた。



館林の様々なうどん



- 館林では、地域の気候や土壌と合わせ、こうした流れのなかで麦の生産量が増えていったことが予想できる。
- 松平清武が館林城主であった享保七年(一七二二)の将軍家への献上品として「饅飩粉一箱」の記録がみられ、その後の城主(太田家や秋元家)の将軍献上品の記録にも、「饅飩粉」が登場しており、江戸時代から「うどん」が館林の特産品としてあったことがわかる。
- ちなみに、現在の小麦生産量では群馬県は全国四位である。

15 麦落雁

(郷土銘菓 民俗 風土)

・大麦粉を利用して作られた麦落雁は、館林を代表する銘菓^{めい菓}で、文政年間(一八一八〜一八三〇)に完成して以来、館林城主献上の栄を賜っていたという。

・城下町に根付いた茶菓子から発展し、明治時代には「つつじが岡」の園内で館林名産として販売され、沼辺のもてなし文化を彩るものとなった。

基礎データ・参考資料・関連事項

- 「落雁^{らくがん}」はでんぷん質の粉(米粉や小麦粉)に水飴や砂糖をまぜて型に押し、乾燥させた干菓子^{かんし}のことで、茶席菓子や供物として用いられることが多い。
- 大麦を加熱して挽いた粉(一般的に「はつたい粉」と呼ばれる)で作ったものを「麦落雁」と言うが、落雁には大豆の粉を用いた「豆落雁」、栗の粉を使った「栗落雁」などもある。
- 館林地域は麦の産地であることから、江戸時代に「大麦」を挽いて落雁にしたのが館林の「麦落雁」の始まりと言われている。
- 館林では大麦を挽いた粉に砂糖を混ぜたものを「麦こがし」や「香煎^{かしょう}」などと呼んでいる。
- 統計書等に見る館林の「米」と「麦」の収穫量の比較は次の通り。

・明治二十二年(一八八九)

米Ⅱ四万八五〇五石余・麦Ⅱ六万九五三〇石余

・明治四十一年(一九〇八)

米Ⅱ五万六八九一石・麦Ⅱ八万四五二四石

・昭和二十九年(一九五四)

米Ⅱ四万五三四八石・麦Ⅱ七万九三九四石

*昭和四十年(一九六五)頃には米の収穫量の方が多くなる。



館林市内の小麦畑



麦落雁

42 織姫神社と館林紬

(建造物・民俗)

- ・館林地域は江戸時代から綿花栽培が盛んで、農家の副業として機織りが行われ、城下町には多くの綿屋商人がいた。
- ・明治時代以降、城下町に織物組合が結成されて町内に織姫神社を祀るとともに、「里沼」のもてなし文化を支えた様々な織物が生まれ、なかでも「館林紬」は今も続く伝統工芸品となった。

基礎データ・参考資料・関連事項

- 織姫神社は、織物産業の振興・発展を祈念し建てられた神社。古くは織物会館の一角（現在の館林税務署職員駐車場）にあった。平成元年（一九八九）に、長良神社に合祀され、現在地に鎮座する。
- 館林紬の起源は、館林・邑楽地域で鎌倉時代に産出されていた「鶉織」と称する織物に由来する（『群馬県邑楽郡誌』）。しかし、この「鶉織」は、木綿ではなく樹皮や植物を晒して紡いだ糸を織ったものであるとの説もある。
- 宝暦年間（一七五一〜一七六三）には下総結城地方の機織が栄えた影響を受け、館林近郷でも農家の副業として自家収穫の綿花を用いた結城木綿を製織した。これがのちの館林紬に発展したとされる。館林紬は、真綿から糸を紡いで織られた木綿織物である。
- 館林紬の隆盛を物語るように、昭和三年（一九二八）工業試験場が建設された（現在の仲町）。昭和五年（一九三〇）には館林織物同業組合が結成されると、この建物は組合事務所として使用され、一時期本館・新館があった。
- 館林紬の製品は「唐棧縞」と呼ばれる縦縞と、使用のたびに肌に馴染む素材が最大の特徴である。また、落ち着きのあるデザインは、時代変化を問わず受け継がれ、和・洋を問わず高い実用性もある。現在でも館林市が誇る伝統工芸品（もてなしの品）のひとつとなっている。



織姫神社（長良神社敷地内）



館林紬製品

※イメージ図作成
ヤスラオカイツペイ ART STUDIO

日本遺産 「里沼 (SATOINUMA)」
ガイドの手引き (里沼ランドナビゲーター育成講座テキスト)

発行日 令和四年 (二〇二二) 二月
発行 館林市「日本遺産」推進協議会

〒三七四―〇〇一八
群馬県館林市城町三一―

館林市教育委員会文化振興課

日本遺産推進係

TEL 〇二七六―七一―四二一一

里沼 (SATO – NUMA)

— 「祈り」「実り」「守り」の沼が磨き上げた館林の沼辺文化 —



ガイドの手引き

【里沼ランドナビゲーター育成講座テキスト】